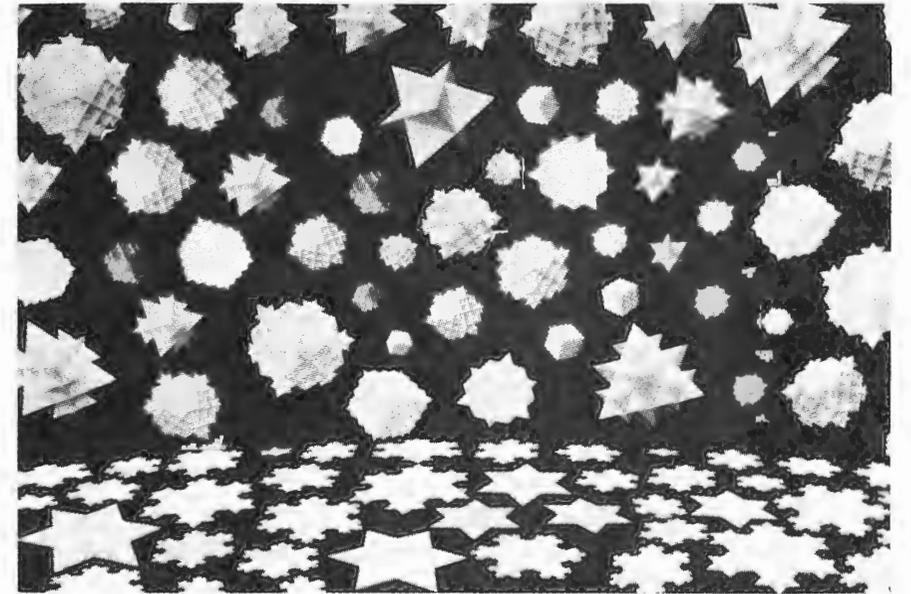


神戸大学
教養部

広報



NO.59

昭和56年10月15日
教養部広報委員会

目 次

— 巻 頭 言 —

天国のち地獄 前 野 繁 ... 1

— 特 別 寄 稿 —

国際障害者年 (IYDP) に因んで 美 崎 教 正 ... 3

— 在 学 生 便 り —

教養部での1年半をふり返って [REDACTED] ... 6

中国政府派遣留学生紹介 [REDACTED] ... 7

— 特集1・私の秘蔵品 —

佐久間象山の書簡 山 崎 馨 ... 8

私の秘蔵品 — COD 稲 積 包 昭 ... 9

唐三彩の女俑 寛 久 美 子 ... 11

河上肇の書 (掛軸) 一 海 知 義 ... 12

— 随 筆 コー ナー —

小学校同窓会と人口ピラミッド 大 嶽 幸 彦 ... 14

A棟の屋上 本 田 烈 ... 15

— 特集2・教養部内研究会への招待 —

科学談話会 16

源氏物語<読書会> 17

人文・社会科学研究会 18

E・シュタイガー『ゲーテ』研究会 19

— ユニークな定期刊行物 —

同人誌「近代」について 本 田 烈 ... 20

「近代」創刊のこと 伊 藤 正 文 ... 20

Kobe Miscellany 三 浦 常 司 ... 22

神戸大学ドイツ語教室「ドイツ文学論集」 大 河 内 了 義 ... 23

ウサギとピラニア (「道」編集主幹) 森 晴 秀 ... 25

Kansai Time Out: a bridge Dave Jack ... 27

三号雑誌と呼ばれて久し

— 「兵庫のペン」15号を出して — 風 呂 本 武 敏 ... 28

なんとなく「たうろす」 川 端 柳 太 郎 ... 29

表紙カット「空中に舞う4次元の雪と地上に積る3次元の雪」

地上の3次元の雪は、大小の正三角形が星形正六角形(ダビデの星)になるように、次々に降り積ってできたもの。

空中の4次元の雪は、大小の正四面体が星形八面体(ケプラーの八角星)になるように、次々に抱き合ってきたもの。

天国のち地獄

前野 繁



あるアメリカ人は「日本人」という本の中で、日本人は大学にはいると勉強しなくなるが、これは理解し難いことだ、と言っている。受験地獄の時の勉強ぶりとくらべると、リラックスし、小説(漫画?)を読み、映画にゆき、プロ野球をテレビで見、女の子とデートし、友達とビールを飲む。それでいて良い成績をとって、何なく卒業し、就職する。アメリカの大学生は入学以前よりもっと勉強する。それでも大学2年次3年次へあがる時落第して退学する学生は多い、と。

十数年前約1年シカゴに留学していた時、日本人の二世でイリノイ大学の建築学科の学生と知りあった。「コンバット」というテレビ番組—日本ではその数年前に人気があった第2次世界大戦の戦争もの—をつけていた彼のアパートで、4年生である彼の同級生の4分の3はdrop out したと話してくれたことを思出す。またそれよりも2、3年前この神戸でアメリカ人の高校3年生と親しくなった。カナディアン・アカデミーに通っている彼はカリフォルニア工科大学志望であった。彼の話では、高等学校の数学には微積分はでてこない、三角はごく初歩的なことしか教わらないから、大学入試では $\sin 60^\circ$ は次のどれか答えよという程度の問題しかでない、しかし大学入学1年後には3分の1から半分の学生が落第し、他のもっとやさしい大学へ転学しなさいと言われるのである。

— 随筆コーナー —

本と業 倉 沢 行 洋 ... 30

— 新教官紹介 —

名曲を求めて 井 上 健 ... 31

十二年ぶりの関西暮らし 谷 本 慎 介 ... 32

山登り 宗 像 恵 ... 33

わが教養時代 米 本 弘 一 ... 34

— 新事務職員紹介 —

教養部にカムバックして 富 田 暹 ... 35

自己紹介 根岸 松子, 加古 道雄, 山本 公一, 藤原 稔
 中嶋みどり, 広山 芳子, 石田 司, 安井 玲子
 山本 博子

— 教養部のうごき —

人事移動 38

進学者数等一覧表, その他 39

学生自治会との交渉経過 40

第二課程学生自治会との交渉経過 41

部落解放研究会との話し合い記録 43

教官写真 48

編集後記

新広報委員紹介

表紙カット 本学学生 [REDACTED]
 本文カット 本学学生 [REDACTED]

国際障害者年（IYDP）に因んで

美崎 教正

そんなことが日本で実行可能かどうか、理学部の先生と話あったことがあったが、恥を基盤とした文化的風土では社会が受入れないだろうという結論だった。それ以後も受験地獄はひどくなる一方である。だから、学生定員の2倍乃至3倍の学生を入学させ、やる気のない学生はどんどん落していけば、受験勉強によって高校教育まで歪められることも少ないだろうし、受験地獄の解消にもなるという論が繰返し出されながらも、アメリカ方式は立ち消えになる。社会が懐く、東大を頂点とするピラミッド型学歴信仰をこわさない限り、大学を兎に角出せば子供の出世、幸福疑いなしという、親の懐く神話を破らない限り駄目なのだろうか。

アメリカ方式と言えば、アメリカの大学で宿題が多いのは有名である。留学中私も研究の合間に学部学生と大学院生の混成のアメリカ文学史のクラスに出ていた。ある時次の授業までにある作家の4,500頁もある作品を読んできなさい、小テストをやりますと老大家の担当教授がおっしゃる。週3回ある講義だったから、次の授業とは一週間先ではなく、翌々日である。不平を言う学生は全くいない。アメリカではそれが普通なのである。そしてその日の小テストには、本に全部目を通してないと答えられない問題が出ていたのである。平生テストだけでなく、レポートの提出もよくある。そのため日本人留学生は土日がふっとんでしまう。休講があった経験もない。学会は休み中に行なわれるようである。当時私立でも州立でも1月約8万円の授業料であったから、授業料がもったいないので休めないと言う日本人の留学生がいた。1時間あたりの額が大学院出の家庭教師に払う額と同じなのである。演習などの授業では時間中にコーラやコークを飲む学生がいたし、パイルズという著名な米語の教授は授業中にぶかぶか煙草をふかせていたが、ベルが鳴る前から教室に来て、ベルの鳴るのを待っておられた。ただ、教官の担当時間数は日本の場合の半分である。

この様にアメリカの学校教育は天国の後に地獄がくる方式であり、日本の場合と逆だと言えるだろう。education という言葉の語源は潜在している才能を引き出すことだとよく言われる。アメリカでは高等学校までそれに力を注ぎ、そして大学で鍛えようと考えるのでよいのだろう。

(英語)

I 国際障害者年とは

本年(1981年)は「国際障害者年」であることは御承知のことと思います。国連が今年を「国際障害者年」と定めるに至るまでの経緯は、最近の運動だけをとり上げても、例えば、国連は1971年には「精神薄弱者の権利宣言」を、1975年には「障害者の権利宣言」を採択し、更には民間団体としての国際障害者リハビリテーション協会が1970年に「リハビリテーションの十年」なる運動を展開している。このような背景のもとに1976の国連第31回総会で1981年を国際障害者年 (INTERNATIONAL YEAR OF DISABLED PERSONS) とすることを決議しました。その後1979年の第34回総会において「国際障害者年行動計画」に関する決議を採択しました。これによりますと、国際障害者年の目的は障害をもつ人の社会への「完全参加と平等」(FULL PARTICIPATION AND EQUALITY) という目標の実現を促進することとされています。つまり障害者も健常者も伍して社会生活にフルに参加し、平等の権利を享受すべきであるとし、更に具体的に次の五大目標を提起しています。

- (1) 障害者の社会への身体的及び精神的適合を奨励すること。
- (2) 障害者に対して適切な援護、訓練、治療及び指導を行ない、適当な雇用機会を与え、また障害者の社会における十分な統合を確保するためのすべての国内的、国際的努力を推進すること。
- (3) 障害者が日常生活において実際に参加すること。たとえば公共建築物および交通機関を利用することなどについての調査研究プロジェクトを奨励すること。
- (4) 障害者が経済、社会および政治活動の多方面に参加し、および貢献することについて、一般の人びとを教育し、周知させること。
- (5) 障害者の予防およびリハビリテーションのための効果的な施策を推進すること。

II FORとOF,そしてINTERNATIONALとWORLD

前述の通り国連では、国際障害者年が最初INTERNATIONAL YEAR FOR DISABLED PERSONSと命名されたのですが、その後INTERNATIONAL YEAR OF DISABLED PERSONSと改名されました。このことは、ただ単に「てに



は」つまり字句の問題を越えています。「障害者のための年」というのでは、障害者は依然として社会の一隅に隔離された存在とみなされ、健常者がこれを哀れんで「慈善」の手をさしのべるといった趣旨の運動になりかねません。即ち少くとも健常者が障害者のリハビリテーションに、あらゆる手段をつくして社会復帰を達成してやろうといったニュアンスが根底に潜むことは否めません。換言すれば、この社会の正常な構成員は健常者であって、障害者は本来この社会に存在すべきでない、いわば「招かざる客」とでもいうべき者である、という考え方が従来からありました。これは心身障害に対する社会の偏見であり、すみやかに改められなければならないものです。国際障害者年が「障害者のための年」forから「障害者の年」ofに改名されたことは、そこに大きな意味があると考えます。

この社会は、健常者と障害者が共存するのが正常な社会であり、例えば障害者を不必要に施設に収容し、結果的には地域社会からの隔離をはかることを極力避けて、家族や、隣人との接触、交流をできるだけ保持することを理想とします。

更にINTERNATIONALという言葉もこれに似た状況を作り上げています。元来、この運動は、人類すべてが、共に生きることを目的としたものであり、民族、宗教、思想等に関わりなく展開されるべき性質のもので、当然この運動には国境はないものと考えます。とするとINTERNATIONAL YEARとするよりWORLD YEARとする方が主旨に則したものであると思考するものである。

Ⅲ 障害とその連続性

障害という言葉は、その使われ方や意味の背景は時代とともに変遷しています。

WHO では、障害に関する分類をして、IMPAIRMENT (生理的欠損) と DISABILITY (機能的制約) と HANDICAP (社会的不利) を使い分けています。日本語ではいずれも障害ですが本当は同じ障害ではないのです。

そこで、「障害」とは「さしさわりの」ことで、肉体的な機能や精神的な機能がそなわられた場合、日常生活にいろいろなさしさわりが出て来ます。国連の資料によりますと、各国において少くとも十人に一人は心身に何らかの障害をもって生きています。しかし又、よく考えてみると、さしさわりの全くない人はいないとも云えます。だれでも何かしらさしさわりをしている筈です。ただ、それが比較的軽い他人の力を借りる必要がなく、自分で意識することも少いということにはかならないのです。なかには「私は全然さしさわりのない」という人もいます。しかしそういう人も何らかの病気になったり事故にあうかも知れません。又そうでなくても、やがて老人になり、さしさわりのある生活をするようになります。

又、更に世界の人口は増加しつづけ、今なお多くの人々は飢え、栄養不足となっており、一方急速な工業化、都市化による労働災害や事故、公害は増加しており、自動車の利用拡大は事故の急増を招き、さらに医療と生活水準の向上から人は長生きとなり成人病などによるさまざまな障害をもって生きてゆかねばならなくなっています。

この事実は私たち一人一人が障害者になる可能性をもっていることを示しています。

障害者問題は、すべての人が、自分自身の問題として理解し、幅広い社会連帯意識によって解決して行かねばならない問題なのである。

Ⅳ DISABLED PERSONS と HANDICAPPED PERSONS, そして REHABILITATION

国連では、障害者という言葉は、先天的か否かに拘らず、身体的又は精神的能力の不全のために、通常の個人的生活並びに社会的生活に必要なことを自分自身では完全に又は部分的にできない人のことを意味すると定義し、更に障害者を DISABLED PERSON (能力不全のある“人”) とし THE HANDICAPPED (社会的に不利な“者”) とは明確に区別しています。

即ち学校で教育を受けることや、働くこと、社会のさまざまな活動に参加することが機能や能力上の制約 (DISABILITY) を理由に妨げられるとした

ら、個人的な機能制約は経済的にも社会的にも不利 (HANDICAP) な状態になってしまいます。肉体的精神的に欠けたところがあって、日常生活にいろいろなさしさわりのある人たちが、社会的に不利な条件をつけられないで済むとしたら、障害者は “DISABLED PERSONS” であっても社会的格差をつけられた “HANDICAPPED PERSONS” にならないで済むのです。換言すれば、障害をもって居るから障害者なのではなく、社会的環境が障害となる時に障害者になるのです。

ここで社会的環境とは、建物や道路、交通機関、標識や標示などの物理的な障壁だけでなく、社会の人々、そして障害者自身の考え方や態度といった心理的な障害も問題になります。こうした「機能制約をもっている人」を「障害者」にならないようにするための予防、即ち社会人としての人権を回復するための医療、教育、職業、社会的なサービスが総合的に行われる活動がリハビリテーション (人権の回復) といわれるものです。

だれもが、どのような条件のもとにおかれても、社会的な不利を被らない社会の実現こそ障害のない社会といえます。障害者のリハビリテーションを実現することがとりもなおさず障害を生み出す社会そのもののリハビリテーションを実現することです。

病人や老人、障害者などをはしに押しやるのではなく、みんなで、たがいに理解し合い、協力して生きてゆける社会をつくること、それが価値ある人間の社会と云えます。その実現を目ざして第一歩を踏み出すのが1981年なのです。1981年に長期計画をたて、その後十年間、その計画が実施されているかどうか、すべての国民が厳密に見守って行こうとも国連では取決めております。

Ⅴ 障害対策は生涯対策

(1) 第一次予防。 病気、ケガ、事故などによって肉体的、精神的な損傷をうけないよう、たえず自主的に、日常の健康点検即ち心身の状況、くらし、並びに生活環境点検を行ない、これらの点検結果をもとにして健康アップ生活の実践を行なう。当然のことながら「健康つぶし」的生活は勇気をもって排除することも必要。

(2) 第二次予防。 一時的に日常生活に支障をきたし DISABILITY の状態になったものを治療などにより機能的制約をなくする。そのためには、医学研究の推進、医療技術の向上、医療・リハビリ施設の充実などが必要。

(3) 第三次予防。 機能的制約 (DISABILITY) をもっている人を HANDICAPPED PERSON にしないようにするための対策 (人権の回復)、

即ち社会的環境の改善に待つところが大きい。特に「物」理的な環境の改善はやさしいが、「心」理的な問題の解決が、より重要であり、これこそ真の対策である。

「障害対策」は、われわれ一人一人が自分の問題としてとらえ、自主的に、しかも協力し合って実践してゆかねばならない「生涯対策」なのである。

Ⅵ 神大教養部と IYDP

神戸大学教養部における障害対策 (障害者対策に非ず) は、その第一次、第二次対策については、従来より、それなりに行われて来たが、最も重要であると考えられる第三次対策即ち機能的制約のあるものを障害者にしない (社会的に不利な状況におかない) 対策については、決して十分とは云えない状況にあったといえる。しかし、IYDP にさかのぼること約1年、1979年12月に、ようやく障害者受入れのための施設整備委員会が設置され、まず教養部の中から DISABLED PERSONS を HANDICAPPED PERSONS にしないための環境整備にのり出した。特に身体障害学生が健常学生と共に生活出来る場をつくるため、現有施設の総点検に始まり、必要な改・増築の要求とその実践がなされて来た。これら施設整備委員会の活動により、徐々に物理的な改善が進行しつつあるが、大学におけるこれら施設の不備は、他教育機関並に地方公共団体のもつ諸施設に比べれば非常にたちおくれていることを痛感する。

この現況は、ひとえに国連の指摘するところの障害者に対する考え方の遅れ、無理解、偏見の結果に他ならない。要は国が、そしてわれわれが、どの程度の決意をもってこの問題に対処するかにかかっていると思われる。これも国際障害者年に課せられた重要な課題の一つである。

少くとも大学教育にたずさわっているすべての関係者と、更には入学して来る学生の一人一人が、国際障害者年の運動の主旨を十分に、正しく理解し、他人事でない自分自身の問題として障害者問題をとらえ、真剣に考えるところから、この問題の解決策は見出されると考えます。やはり問題は、先にも指摘した通り、すべての国民の一人一人の心の問題に帰結すると云えそうです。国際障害者年を機会に、神戸大学 (教養部のみならず) が、すべての大学関係者にとって社会的に不利な状況を温存することのないよう、又その状況にあることさえも気付かないような人間を作ることのないよう、おくれればせながら努力して行ってみよう。 (体育)

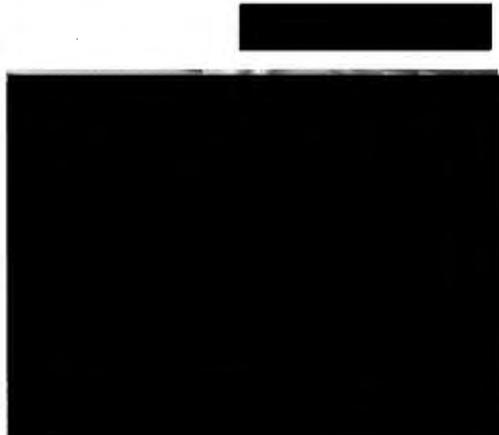


教養部での1年半をふり返って

私がこの大学に入学してはや1年半が過ぎ、この度専門課程に進学することになりました。全聾という障害を持つ私がここまで来れたのは、教養部の先生方および諸方面の方々のおかげであると、深く感謝しています。

教養部での1年半は、しんどい事ばかりでしたがその反面楽しい事もあり、私にとっては充実した毎日だったと思います。

去年の4月にこの大学に入学した頃は、2年間の受験生活を終えてやっと大学生になれたという喜びと、大学での講義に自分がついていけるだろうかという不安が、私の心の中で入り混じっていました。私は講義を理解するために次のような方法をとりました。すなわち、教科書を用いない講義の場合、その内容をテープに録音させていただくこと、それと語学の場合、前日やってきた予習を見ていただくことでした。前者の場合は、一番前の席にすわらなければならず、そこでテープレコーダーを操作することには最初抵抗感があったのですが、すぐ慣れました。録音したテープは、家の人に頼んでノートに書き取ってもらいました。先生の冗談さえも一言余さず書きとめられたこのノートを読むのは一苦勞でしたが、試験の時は大いに役立ってくれました。また後者の場合、当然の事ながら毎時間の予習が必要でした。中・高を通じて英語が最大の不得意科目であった私にとって、大学での語学も例外ではなく、毎晩遅くまで辞書を片手に悪戦苦闘しました。けれども、このおかげで語学に対する自信もついたり、試験でも予想以上の好成績を収めることができました。ただ、勉強時間の大部分を語学に費してしまったため、自然分野科目の勉強がおろそかになり、試験には事実上一夜漬けだけで臨むことになってしまった点は反省したいと思います。幸いにもほとんど通ることができましたが、先生方には悪い事をしたと思っています。ところで、専門外の人文・社会分野の科目を授講してよかったと思うことが今までに何度もあります。例えば、テレビや新聞などで講義の中で聞いた事が出てきたりする時です。その講義を受けていなかったら、自分にはあまり関係のない事として見過ごしていたかも知れませんが、講義を通じて大体理解していると、その記事が実に興味深く感じられます。このようにして、政治、歴史などが私にとって身近なものになりました。私は、自然分野も含め教養科目は身につけておくといつかは役立つものだと思います。



今、私は美術部凌美会に所属しています。入学した頃、友人から何かクラブに入った方がいいと勧められ、それからいろいろ迷ったあげく、中学の時美術部に入っていたということで、今の所に決まったわけです。結果的には、これがそれからの心の支えになったので、入部してよかったと思っています。何と云っても、コンパの時や、麻雀をやっているのが楽しい。しかしそれよりも、クラブの良さというのは、仲間がいるという点にあると思います。コンパも麻雀も仲間同志でやるからこそ楽しいのでしょう。コンパと言えば、新歓コンパの時は悪酔いして大変でした。あんなに酒を飲んだのはあれが初めてでした。また美術部だから当然展覧会があります。年に6、7回ある展覧会に出品すべく、部員としての義務感から大体1カ月位前から書き始めるのですが、勉強もあるし、文字通り悪戦苦闘でした。何とか間に合った時は、本当にほっとしました。私は他の事を何も考えずにキャンパスに向かって筆を走らせる、その瞬間瞬間が一番好きです。他にも、障害者問題研究会というものもやっており、また、今うわさのマイコンの勉強もやっていますが、それらも合わせてこれからもできる限り勉強と両立させていきたいと思っています。また、図学の宮崎先生のGにも入りましたが、ここではいくつかの多面体の模型を作りました。これらはうんざりするようでしたが、模型作りの好きな私には楽しめる作業でした。Gでの1年半で、私の多面体に対する興味が確固たるものになったことも告白しておきます。

さて、専門課程では卒業することを当面の目標として努力していきたいと思っています。私は自分が障害者であることにひげ目を感じたことはないし、これからの未来も明るいと思います。最後に、教養部で私に関わってくれた皆さんへ、この1年半どうもありがとうございました。(工学部システム工学科2回生)

中国政府派遣留学生紹介



神戸大学は、国際の交流に、活躍している。神戸大学はほかの国立大学と同じように、中国政府派遣留学生を受け入れている。全部で18人ですが、とくに、そのなかで、**■■■■**(女、一年生、元■■■■大学に在学して、本大学工学部建築学科)、**■■■■**(男、一年生、元■■■■大学に在学して、いま、本大学理学部物理学科)、**■■■■**(男、一年生、元■■■■大学、現在本大学工学部計測工学科)、**■■■■**(男、一年生、元■■■■大学、今、本大学経営学部)、**■■■■**(女、二年生、元■■■■学院、現在、農学部農芸学科)、**■■■■**(男、二年生、元■■■■大学、現在、工学部システム工学科)、**■■■■**(男、二年生、元■■■■大学、現在、理学部物理学科)等8人の学部生を受け入れている。この8人なのに、性格と趣味はさまざまである。活発な人も有れば、沈黙な人もあるし、趣味がゆたかな人もあれば、乏しい人もあるし、音楽が好きな人もあれば、スポーツが好きな人もある。8人の学歴は、ほとんど同じで、5～6年の小学校、日本の中学校と高校に相当する4～5年の中学(学年は地方によって、多少の差がある)をへて、全国共通一次試験を受けて、大学の門をくぐった。そして、半年もたらず、それぞれの大学と分かれて、長春へ行って、一年間近くの日本語の特訓を受けた。そのおわりに、日本文部省の留学試験を受けて、日本にきた。一年間苦勞のおかげで、聞く方は何とか行けるが、話す方が、まだまだ不十分である。

周知のように、中日両国人の友好交流は、ずいぶん昔から、はじめられてきた。歴史をふりかえってみる

と、その友好交流の代表者としては、中国の鑑真和尚である。日本においても、たくさんの遣唐使・遣唐使・留学生を、中国に派遣した。いま、日本全土で、一番、人気を呼んでいるポートピアにも、これを記念した遣唐船を展示するIBM館がある。この友好交流は、昔にしても、近代にしても、ますます発展していくと思う。1840年のアヘン戦争以来、中国は、ほかの先進国家より、だいいぶおけている。これをとりもどすため、たくさんの留学生を海外に派遣してきたわけである。戦前、日本に留学してきた留学生の数は、なんと1万人にもおよんだそうである。いま、日本留学している人は、およそ千人近くあるということである。

われわれは、日本に来て、しばしば日本の友人に問われたことがある。それは“あなたたち、なぜ日本を選んだか”という。が、わたしたちは、いつもこうこたえた。“我国は、工業においても、農業においても、アメリカ・日本のような、先進国より、だいいぶおけている。これらの先進国をおいけるため、日本を学ぶために、日本に来たものである。日本は、アジアの国であるから、アジア民族の特性をもっている。日本のやり方は、中国にとって、比較的現実的であろう。”

われわれは、日本に来て、日本の国民とおおいに接触して、お互いの理解を深め、又、文化交流を一層深め、両国人民の友好に貢献しようと思っている。勉強の方も、日本人の学生と同じように、がんばっていきたくて思っている。どうか、われわれが日本にいるあいだ、よろしく願い致します。

(工学部計測工学科2回生)

特集1・私の秘蔵品

秘薬・秘密・秘画・秘書…と秘のつく表現には何か我々の心をときめかす力をもっている。秘蔵品もそうだ。これにあたる英語の a treasure, a treasured (favourite, prized) article に胸騒ぎをおぼえることはない。家人寝静まった夜更、ひとり秘蔵品を前に人生の喜びを感じられている方々も多かろうと思い、「私の秘蔵品」なる特集を組んでみました。

Where your treasure is, there will your heart be also. —St. Matthew 6:21

佐久間象山の書簡

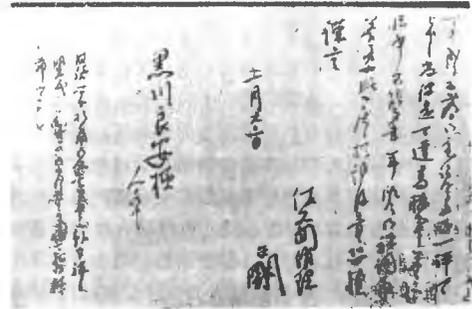
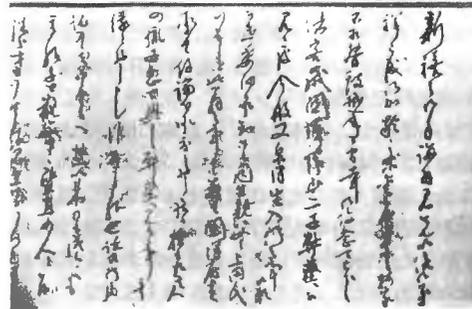
山崎 馨

私は佐久間象山(1811~1864)直筆の書簡一通を持っている。この書簡は安政六年(1859)二月に信州松代の象山から加州金沢の医師黒川良安(くろかわ・まさやす)あてに書かれているので、すでに百二十余年を世に経ていることになる。発信者象山は幕末の兵学者として名高い人物であるから、いまさらここに紹介の筆を費すには及ぶまい。しかし、受信者黒川良安(1817~1890)は一般にはほとんど知られていないようなので、その略歴を述べておくこととする。

良安は文化十四年二月六日、現在の富山県中新川郡上市町に、医師黒川元達(玄龍)の長男として生れた。十二歳から二十四歳まで長崎に留学し、オランダ語に熟達したばかりでなく、ひろく当時の自然科学、人文科学を修めた。その後、緒方洪庵の紹介により、江戸の蘭学者坪井信道に師事した。当時象山はオランダ語の兵書に難渋していた。象山からオランダ語の指導を求められた信道が、適任者として象山に紹介した人物こそ黒川良安だったのである。以後象山と良安との親交が続くことになる。三十歳にして金沢に移り、医師としての大活躍が始まる。

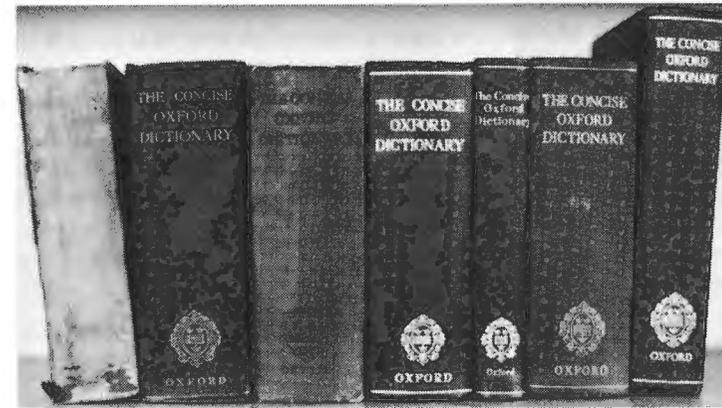
藩主前田斉泰の侍医に登用され、病者は門前に列をなし、門弟は数百人に及んだという。文久二年(1862)には金沢に種痘所が設けられ、良安はその頭取となった。これが金沢大学医学部の起源であり、いま医学部正面玄関に入ったところに、良安の胸像が飾られている。良安はまた鱗の製法を発見し、脳の解剖を試みた。いずれもわが国では最初のことである。五十八歳にして老を理由に引退、明治二十三年、七十四歳を以て卒した。

この書簡の内容は砲学に関することが中心であった。医師良安に対する文面としては不似合の感もあるが、これは良安がある程度は砲学をも解する博学の人であったことを示している。象山知命当時の生活や関心の所在を知るための貴重な資料でもあり、全文を掲げたいところであるが、巻紙の長さ1.5メートルに及ぶ長文なので、首尾のみを写真とする。詳細は「大阪大学医療技術短期大学部研究紀要人文科学篇第二輯」における拙稿に就いて見られたい。なお、『日本歴史大辞典』5-85に「黒川良庵」とするのは誤りである。(国語)



私の秘蔵品 - COD

稲積包昭



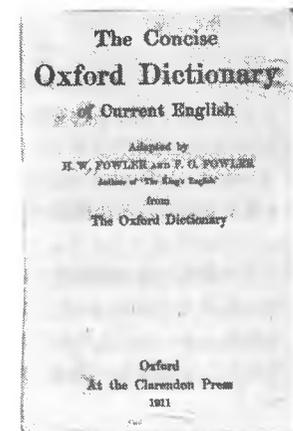
現在、世界最良・最大の英語辞書として知られている The Oxford English Dictionary (通称 OED) は 1928 年に完結した全 10 巻の A New English Dictionary (NED) にサプリメント 1 巻を加え、1933 年に再製本・再発行された全 13 巻の大型辞典である(総頁数、1.5 万、語数 40 万、用例文 180 万余り)。古代英語以後の各語について、その語形変化と意義の発達を各時代からの多数の用例をもって綿密に追跡し、廃語はいつ廃用に帰したか、新語がはじめて使われたのはいつか等、英語の歴史的発達を知るうえできわめて便利なばかりでなく、今世紀初め頃までの英米文学作品を読む際に必備の辞典でもある。この専門家向けの OED を基にして Fowler 兄弟が 1911 年に作った現代英語の 1 巻本の小型辞典が The Concise Oxford Dictionary of Current English (通称、COD) である。この COD は初版以来、我が国でも広く親しまれ利用されたばかりでなく、英和辞典の発達にも大きな影響を与えたと言われている。言語は社会の変

動に敏感であり、科学技術や文化の進歩、大きな戦争を経験したあとには夥しい数の新語が生まれる。初版以来、COD は絶えずこれらの新語や外国語から英語に入った語に注意を払い、本文改訂や補遺、付録を加えて時代の必要に応じてきた。本文全面改訂が殆ど不可能な大型の OED に比べて小型の COD の長所が下記の増改訂の歴史を物語っている。

- COD 初版, 1911 年
- COD 2 版, 1929 年(初版に手を入れた改訂版)
- COD 3 版, 1934 年(2 版本文 + Addenda)
- COD 3 版, 1944 年(3 版 Addenda の増補付き)
- COD 4 版, 1951 年(本文全面改訂 + Addenda 付き)
- COD 4 版, 1952 年(4 版 Addenda の改訂付き)
- COD 5 版, 1964 年(4 版の Addenda を本文に組み入れ、語源を書きかえた)
- COD 6 版, 1976 年(全面改訂、見出し語数 4 万、型が少し大きくなる)

写真説明

- ・左から初版, 2 版, 3 版, 4 版, 特製薄型 5 版, 5 版, 6 版
- ・初版扉



唐三彩の女俑

寛 久美子

唐三彩といえば唐代貴族文化を代表する華麗なやきものをいい、唐の永泰公主墓から大量に出土したものが有名だそうである。しかし、そんなことを何にも知らなかった高校生のころ、はじめて唐三彩を見てがっかりした記憶がある。素焼のもっさりした色彩感覚がひどく幼稚にみえたからである。実際に耐えるやきものという感じでなかったからかもしれない。ところが1966年の夏、鄭州、洛陽、西安、延安、北京と旅行した折、洛陽の工芸社で唐三彩の複製品をみているうちに、そんな私がいつの間にかミニチュアの壺や皿を買いこんでいた。それらは帰国してのち、友人へのプレゼントに使ってしまったからもうほとんど手もとには残っていない。それでも一つ立派な唐三彩の女俑が二階の棚にすわりと立っているのだが、これは北京の琉璃廠という町の骨董屋で手に入れたものである。そんなもの面倒だという夫の反対を押し切って私が買いこんだもののだが、当時の値段で14元したので結構高い買物であった（普通労働者の賃金の約四分の1に相当）。北京から上海に郵送してほしいと頼んだのだけれども、断わられてやむなく抱えて持ち帰ったものだと、これは今もって夫が不平不満の面持でいう、大層手数のかかったシロモノなのである。しかし、店員が断わってくれたのが幸いして女俑は無事日本へわたって来れたが、あの時も郵送をうけおってくれていたなら、その数日後突如として起った紅衛兵運動の旋風にまきこまれて叩きこわされてしまったかもしれないのである。1966年8月12日の買物と「現金日記帳」にあり、紅衛兵の大群が毛沢東に天安門前で接見されたのが、18日、まさに間一髪であった。あとにして思えば、あの時琉璃廠の商店の人たちはひどく元気がなかった。すでに極左革命の嵐を察知していたからにちがいない。それは「文化大革命」と名づけられた十年の悪夢のはじまりであった。

ところで、唐三彩の女俑はそれ以前の女俑とくらべると実にリアルに造型されていて多様な表情もっている。考古学的美術的価値からいえば、安宅コレクションにあるような下ぶくれ顔の五等身の像のようなのがいいのであろうが、私の愛蔵品はみごとに八等身、瓜ざね顔の美女である。全長42.5 ㎝、端正な目鼻だちだが、とりわけ目をひくのがそのヘアスタイル。顔の長さが5 ㎝しかないのにマゲの高さと巾は実に8 ㎝もあり、雲かすみまがうヘアスタイルなのである。それでいてバランスが大変いい。



実は中国の古典詩にしばしば女性の髪型がうたわれるのだが、これがなかなかわからない。たとえば白楽天の新樂府に「町世粧（当世ファッションスタイル）」という諷諫詩があってその中でやり玉にあげられているのが「^{えんかん}鬢無^{ついで}く推ケイの様」というヘアスタイルなのだが、これが実際どういふものかは推測するよりしかたがないのだ。そこで貴族墓出土の女俑が熱いまなざしで観察されることになるのである。

白楽天は「時世粧」の中で、伝統的な中国スタイルでない西域かぶれの化粧もやり玉にあげている。黒っぽい口紅、斜めにくっきりつける頬紅、八の字になるような眉のかき方、まるで泣顔みたいどにかがにがしげにいい、元和時代（白楽天のころ）の化粧、ヘアスタイルは、「ケイ推面^{ついでん}シャ」なんぞで、華風ではないぞといきましている。いつの時代でも「良識者」は女の貪欲な化身熱を攻撃するのに忙しいが、それでも女たちは流行を追うのに余念がないようで、わが女俑も宮廷の女であったのだろうが堂々たるトップファッションぶりである。この女俑、もちろん複製品であるが、それにしてもいつごろどこから出土したもののコピーであるかということが全然わからない。もしかしたら白楽天の「時世粧」の詩句から逆に現代の匠が創造欲をかきたてられて「再現」してみせたものかもしれないと思うことがある。そう考えてみるのも又一興、唐代の詩をよむとき、私はいつもこの像を眺めて空想にふけるのである。

(中国語)

もしも、初版から最新6版まで全部集めることができたなら、古代英語から現代英語までの長い歴史をOEDによってたどることができるように、短い期間ではあるが変化の激しかった現代英語の姿をこのCOD全6巻によって知ることができる（英語に入った日本語は時代とともにどのような変化があるか等）。全6巻を前にあれこれ想像しながら、調べていくのは実に楽しいことだろう。こんなことを考えはじめたのは6版が刊行されてからである。COD歴は5版から始まった。少し部厚いけれど机上で片手で引けるし、鞆に入るしでこの5版はよく利用した。そのせいか神田の古書店で手に入れた初版は2版とともに私にとって自慢の辞書であったがまだ全巻揃えようという気持はなかった。1976年に6版が刊行され、机上に初版、2版、5版、6版と並んだ時、目標が決まった。しかし、いざその気になって探し始めると全然見つからず4版までに4年が過ぎた。

1965年：COD 5版(1964)東京・三省堂、1500円
 1967年：COD初版(1911)東京・神田、500円
 1968年：COD 2版(1929)東京・神田、700円
 1976年：COD 6版(1976)神戸・丸善、3800円
 1980年：COD 4版(1951)於浜松、2500円
 1981年：COD 3版(1949)於松本、1000円

新開地の古本屋に古いCODが出ていると教えられて、大学の帰りに寄ってみたこともある。うず高く積まれた本の山の下に確かにあったが、何版かわからないので手に取って見たかっただけけれど、店員は山がくずれるのをきらってさわらせてくれない。その日はあきらめて、一週間後にもう一度見に行ったら、山はなくなり、そのCODも姿が消えていた。しかし、この5月、信州松本の小さな古本屋でとうとう3版を見つけ、大願成就を喜んだのも束の間、実は上の表にある通り、3版4版にそれぞれ2種類ずつあることがわかった。大願成就ではなかったのだ。失望も大きかったが私にとって秘蔵品であることにはかわりはない。

注1：OEDは現在New Supplementsが2巻(A-G, H-N)まで刊行されている。

注2：同じくFowler兄弟の手になるCODより小型のThe Pocket Oxford Dictionary(POD)も現在6版まで出ているが紙面の都合上言及しなかった。

注3：現代英文法講座11巻(研究社)によれば1957年に多数の新語をAddendaとして収めた増補判が出たとある(p.11)。これが正しいならば4判は3種類あることになる(調査中)。(英語)



阿 典 (オリンピック競技場)



巴 里 (傷兵院)

ヨーロッパの風景

森本まゆみ (英語)

河上肇の書（掛軸）

— 海知 義 —

ものを秘蔵する柄でもなく、その趣味もない。たまたま手もとにあるこの品も、いずれはしかるべき公共の施設に収めるつもりだが、しばらくは眺めて楽しんでいたい。

マルクス経済学者河上肇（1879-1946）は書画をよくする文人でもあった。数年前、半蔵にかかれたその書のニセ物が、十数万円の値で売りに出されたことがある。小さなニセ物が高値をよぶのだから、わが「秘蔵品」は何十万もするのだろうか。

この掛軸、やや古ぼけた桐の箱に収められている。箱の蓋に河上さん自筆の肉太の字で、

二友余枝

と墨書してあり、その下に小さく、

瓶花図並残春詩

とある。紅い牡丹に似た花の絵は、河上さんと京大で同僚だった経済学者河田嗣郎氏の作。花の図の賛のごとき残春詩は、河上さん自題の漢詩。したがってともに経済学者である「二友」の「余枝」、というわけだろう。

蓋の裏にも、同じく墨書して、

祝岡本仁兄壽華寿 辱知六十四翁河上肇

とあり、「閉戸閑人」（河上さんの号）の朱印が押してある。岡本仁兄とは、河上さんと同郷の友人で、和歌山や山口の高商校長をつとめた岡本一郎氏。その「華寿に壽（のぼ）るを祝う」というのだから、還暦祝いに贈った軸である。軸をひろげてみると、書画のかかれた和紙はタテ49cm、ヨコ31cm、それをややみじかめの掛軸に仕立ててある。

さて、二行に分けて書かれた詩は、つぎのように読める。

心平無厭夢身静有良朋
愛此残春夕悠然待月升

五言絶句である。そしてそのあとに、

岡本仁兄清鑑 壬午春日重録旧作 河上肇

とあり、「閉戸閑人」の印。壬午は1942年（昭和17年）だが、「重ねて旧作を録す」という旧作「残春」の詩は、前年5月の作品（岩波新書『河上肇詩注』p. 91参照）。

掛軸は、三年前の初夏のある月、ひとりの上品な老婦人によって私の研究室にとどけられた。老婦人は「岡本仁兄」の養女にあたる。

当時、河上肇晩年の日記を読んでいた私は、昭和16年2月23日の条に目をとめた。

島根県工業試験場長金子弥市氏の依頼により昨



日色紙短冊を書き了え……

『河上肇全集』の詩歌部分の編集を担当している私は、断簡零墨といえども見すごすわけにはいかぬ。さっそく調査をはじめ、いろいろ苦心したあげく、ようやく金子夫人の兄岡本一郎氏の養女佐藤美都子さん（箕面市在住）をさがしあてた。金子氏あて色紙の所在は佐藤さんもご存知なかったが、かわりにこの軸をわざわざ持参され、何と惜しげもなく私にくださったのである。

以後、私はときどきこの「秘蔵品」をとり出しては眺める。そして、この詩には何か寓意があるなど思う。寓する所はさだかでない。しかし何かある。

詩に見える「厭夢」とは、悪夢にうなされることをいう。出獄後、河上さんは特高警察の監視下にあったが、しかしもはや過去の「厭夢」もなく、心境は平静である。そして悠然と月の升のを待っている。「月」とは、何か。私は河上さんの別の詩「明

月」を思い出す。

忘れ難し 幽園（牢獄）の月

今夜 月光円（まど）かなり

月に歩みて人は野に迷い

人を照らして月は天を度（わた）る

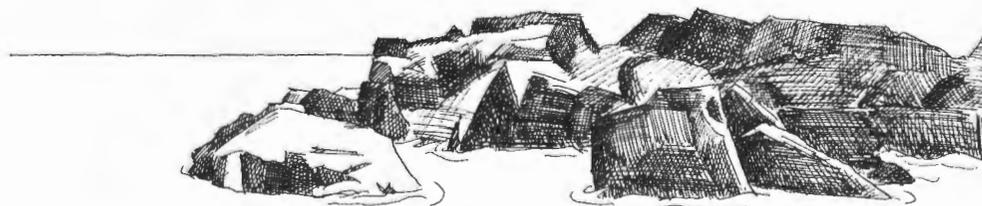
この詩の「月」について、河上さんは弟（画家の左京氏）あての手紙でこうしている。

「ひとには（私が）マルクス主義を奉じて人生の行路を踏み迷ったかに見えるかも知れないが、しかし月（マルクス主義）は少しの間違もなしに大空を渡っているぞ、という寓意を含めて居るのです。」

そうした寓意が、「残春」の詩の「月」にもあるのかどうか。「此の残春の夕べを愛し、悠然として月の升のを待つ。」

そんなことをあれこれ考えながら、私はこの「秘蔵」の書を、いましばらくは眺めていたいと思う。

（文学）



AKIRA★

小学校同窓会と人口ピラミッド

大嶽 幸彦

25年前へのいざない、N市立第五小学校六年五組同窓会への御案内という往復葉書が届いて以来、記憶の底に眠っていたなつかしい顔の幾つかが浮かんで来る一方で、人生の経歴がそれぞれに違い、会っても話が合わぬのではないかとという一種の途惑いとが交錯し、意識は後向きになり、気が沈んでくるのであった。忘れていたものを突然急にゆさぶられ、無理に思い出させられるのも苦痛を与えるものである。それでも25年ぶりという事実にも励まされて、遠路クニへ帰ることになった。

小学校卒業後四半世紀も過ぎると、男子の経歴には相当の開きが出るものだ。事業のうまくいっている者、あるいは失敗し失意の底にある者、また現在の自分に不本意な者、得意な者が一堂に会することは実にむずかしい。それに対し、女子の方は同じ頃結婚し子供を2～3人産み、手がかかなくなると、他人の近況をしきりに知りたがる。配偶者次第で女子の人生は変わって来ようが（男子についても同様）、今のところそれ程の差はなく、似たりよったりであるゆえ、女同士は集まりやすい。しかし、各種の事情で結婚しなかった者、あるいは離婚した者は二の足を踏む。従って女子の中にも来れる者と来れない者との区別ができる。

さて、同窓会には恩師を呼ぶ慣しがあるが、なつかしさを感じて出席する者と、いまだに嫌って来ない者も出よう。女教師は大学出たての新米ホヤホヤで若干えこひいきが見られたし、何しろ男女合せて61名の生徒数は多すぎた。クラスの中で成績の良かった者と問題ばかり起して手を焼かせた生徒には教師の関心がいったとしても、比較のおとなしく目立たぬ生徒にはあまり愉快な教師と写らなかつたであろう。教師には生徒1人1人の性格を飲みこみ、分け隔てなく接するという神わざが必要とされようが、教育歴うん十年を越えたベテランで、しかも教育熱心でない限り、それは無理な注文というべきものであるかもしれない。少年・少女という幼児から大人に少し向いつつある微妙な年頃の教育は相当骨の折れる仕事ではなからうか。しかも美人教師ときた上、六年生の時に結婚した（担任は五・六年生と持ち上がりであった）ゆえ、憧れていた一部の生徒には相当のショックを与えたようだ。出席者男子9名の中にも2人の独身者を見たが、1人は酔いにまかせて教師と結婚したいと口に出した。

われわれの世代は第2次世界大戦の頃生れたので、

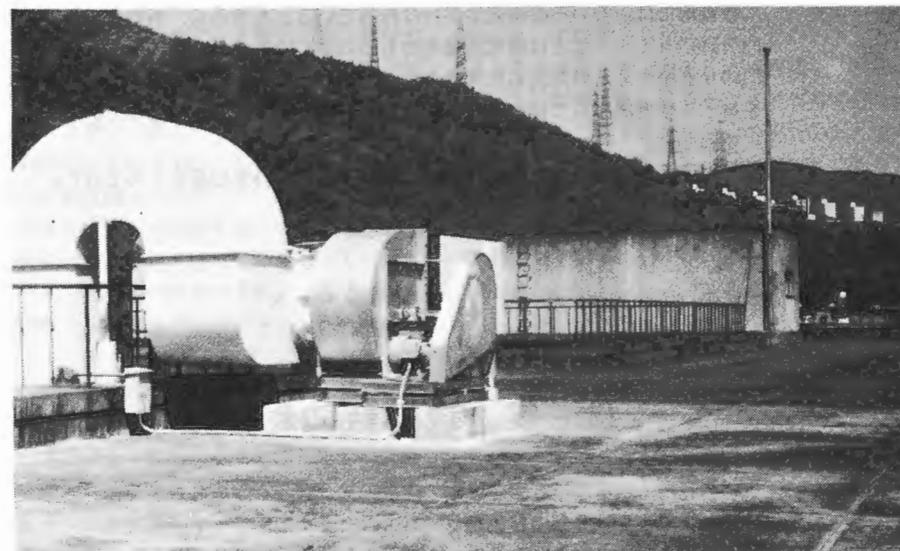
級友の中には戦死者を父にもつ者が何人もいる。また、何人かは海外からの引揚者の子弟であったが、日本に帰ってからはめぐまれた環境になく、貧しさから来る心のすさみもあった。授業中に気象研究と称して途中から抜け出し、形だけの測定をした後は休み時間までダベッているグループもあった。筆者も副級長でありながら気象研究が好きであった（と当時は思い込んでいた）ゆえ、悪友グループに誘われて授業をサボル者の1人であって、女教師の覚えは良くなかった。教師はお坊っちゃんタイプで好男子、おとなしい男子が好きであったから、反抗的な男子生徒を数多く生んだのである。

同窓会に出席した女子は結婚している者ばかりで、未婚の者は身体障害者のS嬢の他は1人も来ていなかった。われわれは昭和17年から18年にかけて生れており、女子の結婚相手の年齢は昭和13年から15年あたりになる。その頃といえば、日中事変が起き、戦争に動員されたため出生率が急に落込み、人口ピラミッドの窪んだ箇所である。無論、同い年やその前後の年齢と結婚するケースもあるし、家庭の事情で結婚しない者、あるいは結婚する意志のない者もいるであろうから詳しいことは人口ピラミッドをにらんでいてもわからぬ。こうしてみると人口ピラミッドの上から考察を加えるには、社会学的調査、心理学的調査まで進めないと、真相はわからないであろう。（1979年12月記す）（地理学）



A棟の屋上

本田 烈



私の研究室はA-416、光庭内に設けてある非常階段へ出る扉の向かい側である。紛争中のあの階段にまつわる思い出もあるが、それはさておき、私はよくあの扉をあけて外へ出る。外と申して、出た所は階段踊り場なのであるから、降りるか昇るかするよりほかない。ああいうすけすけの階段を可怖がる人もあるようだが、私は平気である。

降りたら何処へ行くか。封鎖中は……いや、それはさておいた。3階のあの扉が施錠してなければ、A棟3階の西のほうの部屋を訪れるには近道である。例えば、せんだって、資料室委員会の要請であの部屋を片付けた時である。伊藤正文さんが自分の部屋にあった「近代」バックナンバーすべてを、私の部屋の床の上に横積み詰めて、文学部へと飛んで行かれた、その「近代」一切を、序でに資料室に一応入れさせて置くことにした。その時、4階と3階のあの扉を開け放ち、紐で留めて、近道をして運んだ。それでも、私ひとりの労働で2時間かかった。あとで知ったが、そんなに急いで片付けることもなかったようである。

昇れば何処へ行くか。すなわち屋上である。概してビルディングの屋上は醜い。室内を快的にする為の仕掛けが臙物然と不快なとぐろを巻いているものだ。ところが、わがA棟の屋上は、そんなに醜くはないのである。わびしいテレビアンテナ3本と、質素なクーリングタワー2基と、そして、食堂からの排気ダクトの、之はかなり巨大な末端と、それだけ

である。

ただ、このダクト、屋上に到るまでの途中が問題である。薄っぺらいブリキ製の、1辺70センチの四角い筒が食堂から屋上まで、光庭の中を貫いている訳だが、ひとたび、5.5キロワットの三菱のモーターがファンを作動させ始めるや、薄っぺらいブリキ四角筒は呼吸をはじめ、ブワブワ・ゴォゴォ・ダクダクと身震いし、光庭に面する部屋といわず廊下といわず、その身震いをとどろきわたらしめるのである。こんなことと判っていたら研究室をかわるのじゃなかった、と米沢さんは教授会の席で文句を言われた程だ。あのダクトは午前6時半ごろから始動する。

だが、屋上に出て了えば、視覚的・心理的に周囲がカラリとひらけるから、ファンの音も、そして、お世辞にも好ましいとは申せぬダクト末端からの匂いも、さして気にならぬ。運動不足を自覚する早朝、海を眺めやったり山を仰ぎみたりしながら、10周ばかりのジョギングをする時など、あそこは快的ですからある。家治川さんにその事を言ったら、いや、やっぱり土の上を走った方がいい、とおっしゃったが、私には何と云ったってあそこが手取り早いのだ。

かって、雨水が溜まってあそこにアメンボを見たことがあり驚いたが、あのアメンボ達、六甲山へ昇ったか、御影の浜へ降りたか。（フランス語）

特集2・教養部内研究会への招待

教養部ではいろいろの研究会が行なわれている。もちろん、各教官の専門分野のセミナーなどは研究活動そのものの中心であるが、その他に、専門のワクをこえた研究会も活発である。これらは、さまざまな専攻の教官を擁する教養部ならではのもので、研究・教育の貴重な養分となっているに相違ない。

「広報」ではこうした活動の一端を紹介するべく特集記事をくんでみた。

科学談話会

様々な専門分野の研究者を擁する教養部の特色を生かし、科学についての視野を広めようという主旨で、「科学談話会」と称する集まりをもっております。各教官の研究やその周辺のトピックについて、できるだけ平易に話題を提供していただき、自由に議論しています。夏休み、冬休みにはビアパーティや忘年会で懇親を深めています。

1977年にスタートして以来、既に22名の方々からお話ししていただきました。教養部で行なわれている研究内容を知り、また、相互の交流を深めるための一つの場として役立ちたいと考えていますので、教官に限らず、広く職員、学生の皆さんの参加も期待します。

参考までに、今までの内容を紹介しておきます。

1. 鎌木 誠 (物理)：格子ガスモデルに於ける基底状態の構造
2. 今枝国之助 (ダブリン高等研究所)：四元数 (クォータニオン) にもとづく電気力学と相対論 — アイルランドで考えた物理学 —
3. 林 文夫 (生物)：生体膜と生命現象
4. 宮田隆夫 (地学)：東アフリカの地質と大地溝帯
5. 藤越康祝 (数学)：統計的方法と科学的推論
6. 宮崎興二 (図学)：多次元図形
7. 渡辺 正 (理・物理)：宇宙創世と素粒子
8. 曾谷紀之 (化学)：Reactive Silica (リアクティブ・シリカ)
9. 渡辺邦秋 (生物)：オーストラリアの自然と植

物の種分化

10. 広森勝久 (数学)：いろいろな幾何学 — B. C. 3世紀から20世紀までのおはなし
11. 平川和文 (保体)：トップアスレートの条件について
12. 本間康浩 (物理)：Fermi国立研究所におけるニュートリノ実験
- 森井俊行 (物理)：— コメント —
13. 北谷正行 (化学)：構造と生理活性についてのやさしいおはなし
14. 田中克己 (情報)：データベース研究の最近の動向について
15. 川口正昭 (情報)：素粒子をさぐる
16. 渡辺 清 (数学)：多変数関数について
17. 小早川恵三 (物理)：素粒子の構造と反応
18. 寺門靖高 (地学)：隕石のお話
19. 角野康郎 (生物)：種の多様性と生態学 — 一種レベルの生物学 —
20. 尼川大作 (生物)：動物行動学と神経生理学との接点 — 昆虫の行動を中心に —
21. 小野厚夫 (情報)：泡箱写真の解析
22. 中川保雄 (自然科学史)：技術の発達と社会的変化 — 日本の伝統的技術と近代的技術の例を中心に —

56年度世話役 角野康郎 (生物)
林 文夫 (生物)
渡辺 清 (数学)

源氏物語 < 読書会 >

何か教養部内で行なわれている隠れた催し物なり、それに類するものがあれば、それを集めて特集を組みたいから、そしておまえは何でも源氏物語の読書会のようなことを二三の人たちとやっているらしいから、それについて何でもいいから書いてくれとの注文である。私は困ってしまった。私が<読書会>の一員であるかぎり源氏物語を読んでいるらしいが、しかし一体私は源氏物語を読んでいるであろうか、というどうもそのへんの所が自らかえりみて曖昧なのである。できれば書かずにおきたいという気持がある。

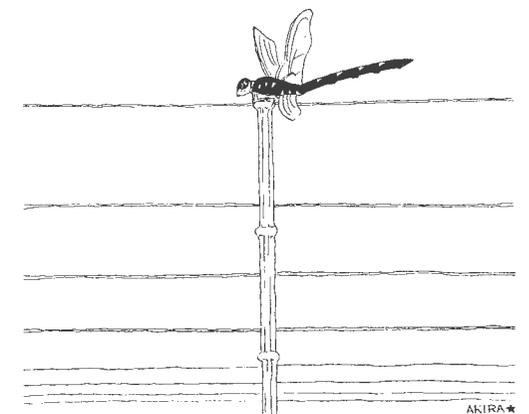
以前、自然の神秘という題であったか、植物の神秘という題であったか、科学映画なるものを見たことがある。草花の芽の出るところだとか、花の咲くまでの動きだとかを特殊撮影で映写して植物の成長の姿をにんげんの目に見せるのである。例えば白百合であったか、何でもそういう白い花がみるみるうちに開花してゆくのである。いまだ硬い蕾が映る。と、それが次第に細長くなり、ますます白さを増してゆく。と、思っているとつぜん花弁が開き始める。内部から芯がぐんぐん延びてくる。私は息をのんで見ていた。が、見ているうちにふと一つの思いが心にとまった。それにしてもこれはあられもない姿ではないか、と。するとこの思いはみるみる心を領して、無恥、という言葉に思い至った。時間という神秘のヴェールで、にんげんの目から隠されたこの秘めやかな草花の営みを白日のもとに晒す。これは無恥という以外のどういう言葉で表現し得ようか。<のぞき>とは法のとどこかぬところでこそ秘かに行われるものであるが、これはその公然たる正当化に等しいのではあるまいか。植物はにんげんの目の見えない時空で成長してゆく。一度でも植物を育ててみた人なら判る。植物は毎日毎日水をやり肥料をやり、眺めさすって見たところで一向にその姿を変える様子はない。いつまでも同じ姿をしている。しかし、二日でも三日でもその植物のことを忘れてると、いつの間にか姿を少し変えている。まるでにんげんの目を避けているかのようなのである。しかし別に己れの姿を故意に、にんげんの目から隠しているわけではないのであろう。にんげんの活動する時間とは別の時間の中で自らの生を営んでいるだけのことであらう。ゲートに<明らかな秘密>という言葉があるが、植物の生のありようを言い表わすのに恰好の言葉ではある。しかしにんげんの精

神にも、このような植物の営みと同じような営みがあるのではないかと思う。源氏物語を二三の人たちと読みはじめてからもうかなりの年月を経ている。われわれにことさら中世日本の男女のありようを研究しようとか、もののおはれに想いをいたそうとか、古語の勉強をやりましょうとか、そういう目的があったことではない。日常の、騒がしいとは言わぬまでも静かとも言えぬ生活のあわいに、いつ果てるともない営みを読んでみようとしたことである。読むのは日曜日の午後、月一回の時もあったり、月二回という時もあった。二年ばかり中断されたこともあった。別に急ぐ必要はない。だからいまだ、第二帖の<帚木>の終りあたりをのろのろと読んでいるにすぎない。おそらく第五帖あたりぐらいいくると今読んでいる帚木の章などは忘れてしまうかも知れない。それでもよろしい。忘れることもまた必要である。なぜならば、思い出すことができようから。そして思い出すことこそが大切なのであろうから。ただ、望ましいのは、できるだけ目立つことなく一別に隠すつもりはないが — そっと読みついでゆくことである。日常的な時間の背後で何かが育っているかも知れないからである。そういうわけで、この<読書会>はいかなれば極めて植物的な会である。会が終わっても別に巷に出て酒類をかたわらにして、例えば文学の論を戦わすことなどはない。天下国家を論ずることなど、むろんない。ビール一杯か二杯に渴をうるほす位がせいぜいである。ぼそぼそと雑談のひとつときを持ち、あとはそれぞれの方向に消えてゆくだけである。だからこの<読書会>はとりたてて宣伝するほどのものではない。隠された営み、と言えと言えようが、しかし別に隠さなければならぬものでもない。

(小松原千里・記)

E. シュタイガー『ゲーテ』研究会

全巻の下訳を完了した。第3巻の「著者あとがき」をいつもの方法で検討しながらしきりとわれわれの胸に迫ってくるのは、この七面倒臭い仕事を途中で放棄することなく、よくも最後までやり通すことができたものだ、という深い感慨であった。10年という歳月は長い。その間にシュタイガー研究会を中心とする生活のリズムが生まれた。シュタイガーで始まり、シュタイガーで育った「世代」も生まれた（かくいう私もこの世代に属するものである）。またこの間に他校に転任した同僚も少なくないが、シュタイガーの絆はいつまでも切れることはなかった。シュタイガー『ゲーテ』研究会の仕事はこの通り現在収束段階にはいる。既上巻はこの春上梓された。（人文書院刊。目下中巻の印刷中であり、残るは下巻の編集の仕事のみである。訳者の一人としてこのようなことを言うのはおこがましいが、文学のみならず、文化というものに関心をもつすべての人にぜひ一読を勧めたい。というのも、まさしくドイツの、いやヨーロッパの精神がこれまでに経巡ってきたすべての領域、体験してきたすべてのものが、この書の中にある、と言っても過言でないと思えるからである。 （木庭 宏・記）



エーミール・シュタイガー著『ゲーテ』（1952～59、全3巻）は、ここ半世紀間のゲーテ研究にそびえる金字塔と呼び得るばかりか、ドイツ文芸学が生み出したまさにモニュメンタルな作品研究だと言える。同書はしかし、余りにも浩瀚なためか（全巻合わせて1600頁に及ぶ）、刊行後四半世紀にもなるというのに、ヨーロッパはもとよりいかなる国においても未翻訳という状態にあった。われわれドイツ語教室のメンバー十数名が、他学部及び学外からの参加者も含め、この大著の翻訳に取りかかったのは昭和48年初夏のことであり、以来9年にわたり毎土曜日欠かさず研究会を開いてきた。また、毎週のこの研究会に加え、夏には信州で一週間ほどの「合宿」も行なってきた。

文学的テキストの翻訳は、そもそも甲の言葉を乙の言葉に機械的に移し替える、といった単純作業ではない。それは、原文そのものの解釈を必然的に内在させる複雑な過程なのである。ただし、複雑とはいえ、それは厳密な意味での創造の仕事ではない。翻訳はそれゆえ労多くして報いの少ない作業なのである。

ところで、われわれの仕事の進め方であるが、いきおいそれは参加者全員による共訳という形になった。各章の担当者が読み上げる訳稿を全員が一句一句検討するという方法で仕事を進めた。したがって、それは一般に行なわれているような、共訳という名の分担訳では決してない。だがそのために、もともと厄介な仕事で、われわれの場合いっそう辛く、また進み具合も遅々たるものとなってしまった。——いうまでもないが、訳文もまた文体である。文体は「我自身！」から成る。そして他者にこの「我自身！」をいわば押しつけ、それを読ませるところに文体の真髄がある。これに反し、共訳という仕事の進め方は、「我自身！」に対し自己否定を要求する。われわれの翻訳は、まさにこの相反する原理の、えも言われぬ微妙な均衡、二律背反の均衡から成り立つ、他に類例のない実験、参加者にとってはこの上ない切磋琢磨の試みであった。それはさだめし、「我自身！」にのみ生きる人にはおおよそ縁遠い、魅力なき仕事であったろう。長年にわたりこの作業を継続し得たのは、訳者全員に共通する開かれた心と、何よりも原書のもつ汲めども尽きぬ魅力のたまものであった。

今回の「合宿」（8月2日～6日）でわれわれは

人文・社会科学研究会

大野道邦

この研究会は、昭和55年4月、教養部の人文、社会系の教官有志を構成メンバーとして発足した。研究会は、4人のメンバー（依田 博、合田 濤、杉野欽吾、大野道邦）が世話人となり、今日（昭和56年7月現在）まで、8回の例会がもたれた（毎奇数月開催）。

研究会発足の趣旨は、比較的近接した研究領域をもつ人文・社会系教官が、積極的討論・情報交換のために各自の最新の研究計画や研究進展状況を互いに報告しあうことであった。教官諸氏のご協力をえて、研究会は軌道にのり、第一線の、しかも魅力的な諸報告が発表された。

過去8回の例会における、報告者、報告題目、報告要旨は以下のとおりである。

第1回（昭和55年5月）、合田 濤（文化人類学）、「東南アジアに於ける動物供儀のシンボリズム」——インド北東部のロータ・ナガ族やレングマ・ナガ族にみられる動物供儀の構造分析を通して、かれらの共有するシンボル世界の構造が明らかになるのではないか、ということが報告された。

第2回（同年7月）、大野道邦（社会学）、「シンボルの定義をめぐって」——さまざまな視点からなされたシンボルの定義を比較・検討することによって、シンボルの社会的性格を明確にしようとするところろみ報告された。

第3回（同年9月）、依田 博（政治学）、「多数決原理と民主主義」——多数決原理によって決められたことの社会的効力が、絶対的ではなく相対的（決定がつねに暫定的）であること、を明らかにしようとするところろみ報告された。

第4回（同年11月）、杉野欽吾（心理学）、「養育の心理学的研究について」——心理学における行動観察法の問題点が指摘され、あわせて、この観察法の実施例として、養護学校教諭の障害児に対するかかわり方についての観察結果が報告された。

第5回（昭和56年1月）、瀧上凱令（心理学）、「日本人の図形認知」——EFTやGEFTなどの図形認知テストの具体的データにもとずき、認知技能において日米間に顕著な差があることが報告された。

第6回（同年3月）、安井三吉（歴史学）、「中国における民族問題について」——現代中国の少数民族（55族、総人口の6%）をめぐる政治的、経済的諸問題が具体的資料にもとずき報告された。

第7回（同年5月）、須崎慎一（歴史学）、「近

代天皇制国家をどうみるか」——明治以来、8月15日にいたる近代天皇制の変容を、村落レベルの行政文書の具体的検討を通して明らかにしようとするところろみ報告された。

第8回（同年7月）、内田幸夫（統計学）、「経済システムのモデリングについて」——数量的経済政策としてのモデルの予測力について詳細な統計的議論が報告された。

なお、以上のほかに、今年度（昭和56年度）は、竹中 勲（法学）（昭和56年9月）、横山雅彦（自然科学史）（同年11月）、宗像 恵（哲学）（57年1月）、大嶽幸彦（地理学）（同年3月）、諸氏の報告が予定されている。

広範囲の、異なった専門領域から成るこのような研究会は、教養部ならではのユニークなところろみである。なるほど、そこにはあるむつかしさが含まれている。それは、他の専門領域の奥深いところろまで互いに理解がゆきとどかず、研究会での議論も表層部や周辺部をなぞるだけであり、ときによっては単なる雑談に終わってしまうということである。

けれども、よくいわれる、諸科学の「連関性」と「統一性」とを念頭におくとき、このような多領域にわたる研究会の意義をいちがいに否定しすることはできない、と考えている。自分の専門的な仕事上でのある種のゆきづまりや惰性化は、他分野における「蓄積」に触れることで、ときとして打開されることも革新されることもあるかもしれない。また、もろもろの知識は、表層では互いに孤立し無関係であるように見えるが、深層では共通の「根」でつながっているともいえる。

同一分野に限った研究会でさえも、ともすれば形骸化するおそれがある。ましてや、異分野間にわたる研究会を実質化するには、メンバー相互間に相当程度の忍耐や努力が必要となり、なかなかシンドイこととなる。にもかかわらず、他者の仕事の理解や、それを通して透けて見える他者の人格の理解は、自分の仕事や生活の位置づけをはっきりさせてくれるのではないかとおもいつつ、この研究会の持続を願っている。

ともあれ、世話人の一人として、人文・社会科学研究会に、具体的な形での教育・研究上の「共同成果」をひそかに期待している。

（大野道邦・記）

特集3・ユニークな定期刊行物

編集の前に編集者（長）あり。こんな表現が実際にあるのか知らないが（一そういえば、英語の動詞 edit は名詞 editor からの back-formation なのだ一）雑誌、同人誌、新聞等々、編集長の個性と力量がこれほど要求される世界もなかろう。しかし、編集の仕事は労多くして報われることの少ない文化活動といわれている。当教養部にも講義・研究と毎日忙しいなかを名 editor として活躍されている方々がいる。創刊時のエピソード、編集上の苦労あるいは今後の抱負などを「激白」していただいた。

同人誌「近代」について

本田 烈

「近代」を語り得る人としては、伊藤正文さんをおいて無い。しかし今や教養部の人ではない。そこを多少の筋ちがいを承知の上で、しかも上海へ集中講義にゆかれる直前の御多忙の中を、執筆をお願いした。すでに知る人の少なくなった創刊当時の、貴重な記録である。感慨である。

私はといえば、昭和40年ごろからか、たまたま会計や編集などのお手伝いを始めたのが、続いて、今の如き立場になったに過ぎない。

なお、56年7月末現在で、「近代」発行会会員総数は85名、そのうち学外会員は5名、すべて教養部に居られた方である。会費は1人年間12,000円、徴収は経理掛に毎月お世話になっている。学外、他学部の方からは直接いただいている。会計の面倒は仏語の枝川昌雄さんをお願いしている。発行部数はふつう毎号300冊、他大学等の寄贈先は55軒。「近代」発行会総会は不定期だが、2～3年に1度、会計報告や特別講演や合評などの内容でひらかれる。

近く、バックナンバーを整理して、検索に便利なように何処かに並べる予定である。

特別寄稿

「近代」創刊のこと

伊藤正文

「近代」は1952年（昭27）12月に創刊された。来年の12月が来れば、めでたく満30周年を迎えるということになる。「近代」は昨年度末に56号を出したから、年約2冊のペースである。

「近代」という文化同人雑誌をもとうという話が神大の文理学部文科の若い教師たちの間で起こった

のは、同年の夏前であったと記憶している。その話の火付け役は私であった。当時は敗戦後のひどい窮乏と混乱期をようやく脱して、生活的には必ずしも楽ではなかったが、会費を出しあって自分たちの雑誌をもち、各々の発言の場にしたいという空気がはぐくまれてつづいた。

1952年といえば、前年に日米安保条約が調印されたのが発効し、メーデー事件が起こった年である。文学書では武田泰淳の「風媒花」、野間宏の「真空地帯」が出、杉浦明平の「ノリソダ騒動」が「近代文学」に連載されていた。庄野潤三、安岡章太郎、吉行淳之介ら所謂「第三の新人」が活躍を始めた年でもあった。戦後より始まった諸価値への問いかけと検証が一応終わり、各分野で新鮮な業績が生まれ始めていた。

当時、神大の文理学部文科は、制度的には専門と教養の別なく単一の教授会によって運営されていた。研究室も4人同室であったが、阪神御影の学舎（現御影工業高等学校）の同じ階層に並んでいた。住宅事情の関係からか、若い教師（講師、助手）たちは毎日のように、研究室に詰めていたから、意志の疏通や会議には便利である。文化同人雑誌の話を持ち出すと、割合簡単に賛成してくれた。中でもK氏が「お前がやることは何んでも賛成するから、思いきってやれ」と言ってくれたのは大変嬉しかった。話が大体纏って趣意書を書いて同人を募ったところ、その趣意書の中に先輩諸公の「ご鞭撻をお願いする云々」の文言があるのを、K氏（このK氏はさきのK氏とは別人）が見咎めて「君は誰に鞭撻して貰うつもりだ」と詰問されて閉口したのも、鮮烈な思い出として残っている。その言葉は旧人や旧体系に依存しないで、新しい価値の発見に努めていた当時の青年たちの客気をよく表している。とにかく鬱勃たる気象が立ちこめていたことは事実である。

さて、会費（同人数は約30名）を集め、原稿もほぼ揃い、印刷にかかろうとして、最初のそれも最大の困難に会った。印刷所と印刷代の問題である。当時は学術雑誌の数も少く、同人誌は殆ど謄写刷りであった。活字を多く持った名のある印刷会社は限られていて、われわれのような小部数の雑誌は相手にしてくれないし、相談にのってくれたとしても印刷代が非常に高く、とても負担に堪えない。刑務所の印刷は低廉ではあったが、活字や組版及び納期に多くの難点があって、なるべく町の印刷会社に頼みたかった。印刷代は刑務所並みで、印刷技術は一応の水準をと、望んでいたから難渋するのは当然である。

八方塞がりのところに、想わぬところから援軍が現れた。昨年退官された浜田泰佑氏が、自分の後輩で今夏から姫路の郊外で印刷屋を始めたのがいる、不馴れだけれども開店の信用にもなるから印刷代は安くする、と申し出られた。全く渡りに舟で早速お願いした。その印刷屋は春秋社といい、社主の米田氏は姫路の新聞に小説を連載されたこともある文学

青年であった。米田氏は何人かの友人と共同で印刷業を始められたと聞く。私と年齢は余り違わないから、当時は30歳の頃であろう。恐らく草創の意気にも燃えていられたのであろう。かくて鬱勃の気象と草創の意気が合体して、「近代」創刊号は出来上がった。内容的にも些かの自負はあるが、体裁は仲々のものである。印刷・製本とも当時としては立派であり、同人雑誌の中では上位にランクされるであろう。私は今でも、米田氏が安い印刷代で難しい学術性雑誌の印刷を引受けて下さったことに感謝している。もしあの時、米田氏の引受けがなければ、「近代」は解散しないまでも、創刊の時期を大幅に遅らせていたはずである。

「近代」という誌名は、比較的簡単に決まったように記憶している。命名理由の一つは、当時の空気として学術研究といえども、現実と常に接点を保つことが要請されていた。それに否定するにせよ肯定するにせよ、「近代主義」に対する真摯な問い直しも当時盛んであった。竹内好の「日本イデオロギー」が公刊されたのも昭和27年のことである。その二は、これは簡単であって、文化雑誌である以上、文学同人雑誌のような青臭い名前をつけられないということである。大体以上の二つで誌名が決定されたと思うが、要は名前ではなくて内容であるという気持が、命名を手間どらせなかったのであろう。

終りに創刊号の内容一覧を掲げておく。

論文……「ホメロスの視覚性」小川政恭。「大岡昇平『野火』論」楠道隆。「西鶴の翻案小説について」笠井清。「ローレンスのユートピア」二宮尊道。「エドガア・ポオとその時代」前野繁。「『狂人日記』論」伊藤正文。「歴史小説について」小島輝正。

書評……「アランの Kant 論」井上庄七。

ニュース・雑文……「ボードレールの小説」小島輝正。「日本の知識人の平和運動」・「農村の実態報告」長倉保。末尾に「編集のあとがき」

体裁……8ポ2段組（一部3段組）、60頁。

（文学部）



Kobe Miscellany について

三浦 常 司

Kobe Miscellany といっても、教養部では知らない人が多いであろう。誌名が「ミセラニー」だから「ミセラレナー」というわけでもないが、他学科の人々にはほとんど全く配布していないからである。しかし英米文学関係者の間では、全国的にかなり名の知れた雑誌である。

この雑誌は神戸大学文学部・教育学部・教養部の英語教官で組織する神戸大学英米文学会によって発行されており、今春第10号が飯盛亨・竹内義郎両教授退官記念号として出たところである。誌名が英語なので、英語の論文ばかりで構成されていると思う人があるかもしれないが、実際は日本語で書かれた論文も多い。また書評や英語教育論などが載ったこともあり、誌名の通り miscellaneous な内容の雑誌である。本誌は会員の毎月積み立てる会費によって刊行されており、編集には文学部の宮崎芳三、教育学部の辻元一郎、教養部の森晴秀の諸氏と筆者が当たっている。

この雑誌は創刊されたのが昭和34年7月のことであったが、当時筆者は文学部の助手として編集の下働きをしていたので、現在では英語教官の間でも知らない人が多いと思われる創刊当時のエピソードなどをこの機会に少しくわしく記しておきたい。当時の編集委員はすべて退官、転出、または物故されたし、現在の会員名簿を調べてみて、筆者以前に着任された方が35名中3名だけになっているのを発見したからである。

神戸大学では昭和24年の新制大学発足後間もない頃から、英語英米文学関係の教官が2カ月に1度ぐらゐの割合で集まり、研究発表を主とする例会を持っていたが、その発表を活字にしようという気運が盛り上ったのは昭和32年頃からであったらしい。筆者が大学院に籍を置きながら、アルバイトの形で英米文学部の助手を勤め始めた昭和32年9月には、編集委員もきまっており、原稿募集に入ろうとしていた。

最初の編集委員は、文学部の山本忠雄・谷口陸男、御影分校の浜田政二郎・米田一彦の諸氏で、特に米田教授が熱心に動いておられた。しかし執筆者を教官に限るか、卒業生も投稿できる同人雑誌にするかという雑誌の性格に関する根本問題でなかなか結論が出ず、原稿募集の手紙を送したのはその年の暮であった。翌年3月には会員の手持ち原稿有無と誌名などのアンケートをとり、投稿希望の回答のあ

った人々には5月にあらためて執筆依頼状を出すというスローモーぶりで、結局原稿が集まったのは昭和33年の夏休み明けであった。最初の意気込みでは、編集委員が原稿に手を入れたり、採否を決定することになっていたが、実際に集まった原稿に目を通してみると、そももかかないことが分った。山本教授も原稿に手を入れようとしたのは騎虎の勢いであったと言われ、最初の編集委員は原稿を集めただけで1号も出さずに総辞職した。

昭和33年12月に改選が行なわれ、御影分校の米田一彦・二宮尊道・山田祥一の3氏が新しい編集委員に選ばれた。そして編集会議の結果、集まっている原稿を書法だけ統一して、そのまま掲載することになったのである。誌名は会員からのアンケートをもとに編集委員会で相談した結果、文学部の神津東雄教授の Kobe Miscellany を採用することになった（KM第8号の編集後記に山本忠雄教授の命名とあるのは間違い）。また表紙に用いられている Kobe Miscellany という題字は、印刷屋が3種類ほど作って来たものの中から、余り気に入らないながらも、一番ましなものを米田教授が選ばれたのである。第1号には米田教授の書かれた「あとがき」がついており、編集委員の頭文字をとった N. Y. Y. という署名になっているが、これは「なかなかようやとる」という自画自賛の略でもあった。

第1号が出てからでも、この雑誌の性格についての議論が何度もむし返され、第2号が出るまでに4年かかっている。結局同人雑誌ではなくて同僚雑誌だというふうなところに落ち着き、現在に至っている。またこの雑誌の基礎であった例会は近ごろ非常に低調であるが、雑誌の方は、例会が盛んであった頃よりもかえって順調に出ており、今のところつづれる心配はなさそうである。 (英語)



神戸大学ドイツ語教室刊「ドイツ文学論集」

大河内 了 義

昨年秋の教養部広報第57号にドイツ語研究室からの報告をしたが、その中で私は「すでに両分校時代から研究会と称して毎月神戸と姫路を交互に訪れ、いつかは自分たちの研究発表機関をと、とばしい給料からの積立ても始まっていた」云々と書いた。この研究誌には表に『ドイツ文学論集』、裏表紙には Beiträge zur Germanistik という表題がつくことになり、この「広報」59号がみなさんのお手もとにとどく頃には、第10号発刊のはこびになるはずである。今日はこれについて報告する。

まず、1965年初夏という日付けのある第1号の編集後記をみると、こうある一

「私たち神戸大学教養部ドイツ語教室の一同が月例のドイツ文学研究会を始めたのは今から4年前、1961年夏でした。当時は御影と姫路に分校が分れていて、互いに話し合う機会の少ないのも淋しいし、夫々閉じこもって研究するより皆で切磋琢磨し合おうということで、毎月最終土曜日に御影と姫路に交替に全員が集って研究会をもつことにし、あるときは各々の研究成果を報告し、あるときは詩や小説の輪読をしながら、それをもとに活発に討論をかわして来ました。とりとめのないおしゃべりに過ぎたこともあれば、議論が沸騰すると何時はてるともない文学論が深夜のバーにまで持ちこまれることも屢々、毛色の異った連中との議論はこよなき刺戟の場で、互いの文学観の相違を確認し合いながらも、自ずと視野も広がって行ったようです。電車で片道一時間半もかかる御影と姫路での研究会が、4年間殆んど欠かさず続けられたのも、会員夫々がそれなりにこの会を大切にしたいためでもあったのでしょう。

〔中略〕これからもずっと続けてこの会を育てて行きたいと一同思っているところです。

昨年10月両分校が神戸鶴甲山に統合されたのを機会に、積立てた会費で懸案であった論集を出そうということになりました。いろいろと困難な障害がありましたが、殆んど全員の原稿が集り、とくに三木正之氏からは、はるばる留学先のチュービンゲンから航空便で原稿がとどき、ここにやっとな実現の運びとなり、一同感激一入といったところです。誌題を「ドイツ文学論集、1965」と大上段に振りかざしてつけましたが、4年間の研究成果を報告するというわけではなく、エッセーもあれば覚え書も紹介もありで、千差万別、私達の研究会のささやかな会誌というのが正直なところです。しかしこの研究会を統

けながらやがてはもっともっと充実したものをという意気込みの一端と思って頂きたいのです。忌憚なき御批評をお寄せ頂ければ幸甚です」

これは、現在京都府立医大の教授である山本尤氏の筆になるものであるが、今読み返してみても発刊当時の雰囲気がよく出た文章だと思う。ささやかなものではあれ「自分たちの研究誌」のもてることが実にうれしく、誌題をどうしようか、鶴甲の甲をとって「Helm」としたらどうか？ いや Helm ではイメージがよくないから「Kraniche」(鶴たち)ではどう？ Kraniche ねー、いっそのこと瀬戸内の島とヘルダーリンの詩に因んで、「Archipelagus」(多嶋)としゃれたらどうか？ いや、たしか同じ名前の同人雑誌がどこかにあったぞーなどと議論百出、結局平凡極まる表題に落ちつき、しかもわれわれの資力では毎年出すことはおぼつかないから、出た年の年号までを入れて表題としようということ、で、「ドイツ文学論集 1965」ということに決ったことなど今楽しく思い出されてくる。その全部で146頁の第1号の内容は

- ニーチェ研究の姿勢……………大河内了義
- ワーグナー・ノート……………三光 長治
- ヘルダーリンの詩「ハイデルベルグ」……………戸田 政雄
- クライスト「チリの地震」の一解釈……………得津 伸三
- ドイツ語教師とゲルマニスト……………岡村 弘
- ホーフスンスター考……………池内 俊春
- 形式における実験と伝統
- G・ベンと J・ヴァインヘーバー……………山本 尤
- G・アイヒの詩解釈……………新保 勝夫
- ルカーチのカフカ論—抄訳とノート……………菅谷規矩雄
- G・グアルディーニの歴史性の理解について
- リルケ論を中心として —……………小松原千里
- ハイデッガーの「ニーチェ」・覚え書きと抄訳
- ニヒリズムと存在の歴史 —……………三木 正之

350部印刷したように記憶している。その後、われわれの力では2年に1回くらいが適当ではなからうかという話におちつき、1967年に第2号が出、ぼつぼつ第3号の原稿をと考える頃に、神戸大学全体、とりわけ教養部は、日本中を荒れ狂った大学紛争に見舞われた。21時間に及ぶいわゆる「大衆団交」、学舎封鎖、そして学生委員を中心とする教官の誠意をつくした度重なる説得(教授会、評議会へと、学生側へとの両方)も実を結ぶことなく国家権力の出動を要請しての封鎖解除、「大学正

ウサギとピラニア

森 晴 秀
国際文化交流誌「道」編集主幹



常化」という一連の動きの中で、W・フンボルト流の大学の観念である「研究と教授」の二本柱が2本とも大ゆれにゆれた。その辺の消息は第3号の編集後記に語ってもらおう—

「のびのびになって、やっど日の目を見た次第ですが、本号は、「ドイツ文学論集」という表題にふさわしいものではないかも知れません。が、大学紛争以前に出されたわれわれの雑誌の第2号「ドイツ文学論集 1967」という表題を、便宜上そのまま踏襲することにいたしました。

新しい名を冠して、その名のもとに何かを書く、或は、書かれたものをまとめてそれに何か名を冠する、ということに、われわれのメンバーは、一種いいようなない含羞、といったものを抱いているようです……〔中略〕当初われわれは、少くとも2年に1度は全員の者が何かを書く、という約束でこの雑誌をつくったわけですが、約束した人たちの多くは神戸を去り、代って新しい人たちが神戸にきました。その間、大学は荒れ狂い、多くの人たちにとっては、従来のような考え方で従来のようにものを書くことが不可能であることが決定的になりました。そして更に決定的なことは、不変の学的信念に貫かれている人たちが自ららの普遍性を失って、単に1つの立場にすぎなくなったということではないか、と思われまます。

われわれは、こういう状況に置かれたとき、誰もがするように、自分自身の経験に立ち帰って、それを検証し、そこから共同の経験に向って出なおしていく、そういうようにするよりはかはなかったのです。

前号を出した1967年以来5年の歳月が過ぎました。ものを書くにはそれ相応の熟する時間が必要だとはいうものの、5年の歳月は決して短くはありません。その間しばしば本号のために原稿を募集いたしましたが、再刊までにはいたらず、集った小数の人たちの原稿はやむなく他の雑誌に掲載されました……

〔中略〕。1973年春。〕

- その復刊第3号の内容は次のようなものだった。
- 独白的断想……………池内 俊春
 - シラーの歴史理論とフランス革命 序説1
……………神代 尚志
 - カフカ短篇考……………三木 正之
 - フランクフルト・オーデル……………得津 伸三
 - G・ビューヒナー「レオンスとレーナ」
のための覚え書き……………吉安 光徳
 - 伊藤静雄とリルケの場合……………小松原千里
 - W・ハーリヒ著 ハイネとドイツ古典哲学
の革命的意義……………森 良文訳

M. Ibuse : Der Schwarze Regen
(1 u 2 Kap)

(Übersetzt von Ryogi Okochi)

編集子のいう「自分自身の経験に立ち帰ってそれを検証し」ということになったかどうかは別として、論文にせよ、翻訳にせよ、そこにより明確な主体的アプローチという姿勢はうかがわれるように思う。

その後、教室の人数も増え、年刊でないことから起る不都合さなどもあったりするために、1975年以降は年に1回の刊行とし(そのため、残念ながら費用の半分を公けの研究費から支出することを余儀なくされたり、また途中1973年に三木正之氏が文学部に移ったため版元も神戸大学教養部ドイツ語教室から神戸大学ドイツ語教室(Universität Kobe, Deutsches Seminar)へと変わったりした。

10号15年の歩みの間には、亡くなった人、定年退官された人、他大学に移ったりなどした人、新たにきた人、また1977年以来加わったドイツ人同僚など、ゼミナールのメンバーにかなりの異動があり、各人の志向もさまざまである。またこの研究誌発刊当時と比べると現在では研究発表のための機関は他にも多くある。あれやこれやを考えると、マンネリズムに陥らないためには、このあたりで今1度本気で考え、鞭を締め直すべきときが来ているのではなかろうかと、私は思う。(独語)



「働きバチ」が「ウサギ」に変身して、小さな小屋に閉じこめられたかと思うと、今度はキツネ、コブラ、ピラニア、ワニ、リス、etc., 全部で32種類もの動物に姿を変えるという忙しさである。

日本の防衛を米市民が自分の生命まで代償にして本気でやるか否か。ヘーゼル・カーン博士(心理学)とやがら、米市民の意識調査を行なったとき、彼らが日本人をどのような動物に見立てるかという問いに対する回答である。(朝日新聞 81.6.27)

「アイデアをひたたく持ち逃げするから」(キツネ), 「チャンスが来たらわれわれを食い尽くすだろう」(ピラニア), 「そっとのびより、襲う瞬間まで観察している」(コブラ), 「世界中を走り回り、巣につめこめるだけ、手に入れられるものをすべて集めてしまう」(リス), ……。

この調査結果に対する新聞の論評によると、米市民の意識の背後に「カミカゼ」, 「パールハーバー」が根強く残っており、経済的な手ごわいライバルとして日本が復興したことによって、ふだんはおとなしいが、どこか不気味で、背後からののびよるといふ旧日本のイメージが改めてかき起こされたのだ。

一人立ちした子どもを他人として、大人として突き放す。大人になったのだから、自分のことには責任をもて。だから自分の国の防衛は自分でやれと

というのが米国の考えらしい。しかし極東の最前線として日本を位置づけ、米国の防衛のために日本を使う、米本土地ではなく外国の領土で戦った方がよいという考えがある一方で、その子どもが強くなりすぎて親を脅かすのもごめんこうむるという、矛盾した心理がこの調査にも表われていた。要するに、表面はお人よしの米国人は、腹の中では日本人を信用していないということがはっきりしたのである。もっとも米国は与論操作の上手な国、関係機関の望みによっては、かなりの方向づけができることを忘れてはなるまいが、蛇足ながら、米国がいざというときに日本を助けに来てはくれないのだから、軍備強化に向けて挙国一致せよというのは日本政府と企業の愚鈍な論理、あるいは幻想。焼土と化した日本が、元も子もなくなってしまった歴史的事実を彼らは思い出そうとしないのである。敵を作らぬ努力というのもある筈だ。

ところで、日本のお家芸は敵を作らぬ八方美人、全面外交、「和」の精神とかによる平和の旗手(今度は金一億円を出すとか出さぬとか)、相手の心を傷つけぬ腹と腹とのかくし芸、これではなかったか。

しかし敵を作らず、自由自在に世界とつき合うためには、相手の腹が完全に読めていなくては、ツ

Kansai Time Out : a bridge

Dave Jack

Kansai Time Out is an English language mini-communication publication which presents information and views about the Kansai. It is printed monthly on Port Island, Kobe and distributed to residents and tourists in the Keihanshin area. The articles are organised on a seasonal basis and emphasize information about future events. The magazine contains sections on art, cinema, music, theatre, travel and group programs.

The first issue was 4 pages published in Osaka in March 1977. From August 1977 publication moved to Kobe. From Oct. 1977 the size increased to eight pages and May 1978 to 12 pages. From October 1979 we changed the format to the American A4 size increasing the number of pages to 24. Color was introduced for the first time in May 1980 and full color in December of the same year. At the same time the number of pages became 32. We have followed a policy of slow but steady development in order to use our resources carefully and to give an improving image to our customers.

We aim for a clear uncomplicated style since we estimate that at least half of our readers are not native speakers of English. But what is the justification for publishing an English language magazine in Japan? Why is there a need for such a publication?

The answer lies among a conjunction of factors. Firstly, the difficulties Westerners have in rapidly acquiring a reading knowledge of Japanese and therefore of getting information from the vernacular press. Then there is the "alienation" of living abroad in a large conurbation where modern transportation and high inner city rents have "spread" people out over a vast area. Thirdly, comes the disparate nature of the communication patterns between foreigners which are a blend of the network type and the community type.

These different "networks" or occupation groups are businessmen, missionaries, diplomatic staff, teachers and travellers. There are also nationality networks. Lastly, an increasing number of Japanese having lived abroad find readjustment in Japan difficult.

They can make contact through K.T.O. with the same aspects of life they learnt to appreciate abroad. Thus the readership is very diverse. It ranges from new arrivals to long-term residents; young and old; Japanese and tourists. Some readers read only a small section; others read every word. Some to improve their English; others to make contact with their interests. In view of this diversity of readership our slogan is: K.T.O. is a bridge between Japanese and non-Japanese (Kansai Time Out wa nihonjin to gaikokujin o musubu kakehashi desu).

To meet the needs of the readership, K.T.O. attempts to bring European standards, elitism; American energy and democracy; Japanese printing technology, quality control, sense of time, and group loyalty. In this way we move towards "internationalism".

カーというわけには参らない。しかし困ったことに、先方は言葉と論理、こちらは寡黙と情緒。これでは意志の疎通は望むべくもない。相手が言葉で攻めて来たとき、黙っていたのでは相手の主張を認めたことになる。相手にこちらの腹は通じない。おまけに今度の調査でも分かるように、相手は最初からこちらを信用していないとくる。

たとえば「働きバチ」。働かねば給料も上らぬのは米国の方。毎年数編の論文を公表し、数年に1~2冊の著書を出さなくては、助教授は絶対に教授にならないし、従って給料も上らない。上司の思い通りに働かねば直ちにクビ。封建的秩序の中で勤勉を強制されているのは先方の方で、昼寝しているだけで給料も上がり、無事に停年も迎えられるのは桃源郷日本という国。

日本人が働きすぎるから時間当たりの人件費が安くになり、安い製品を輸出する。働きすぎの結果が欧米の市場を圧迫する。だからもう少し休息をおとりになってはいかが、と親切な心づかいを外国がしてくれたとき、大きなお世話だ、働きすぎはお前の方だと米国をきめつけた新聞や評論家、政治家、実業家がいたろうか。日本の労働賃金が安いのは分かっている。しかしこれとそれとは別の話。

たとえば「ウサギ小屋」。1キロ平方当たりの人口は、米国21名、日本280名。米国のリビングルームと部屋の中に、日本の3LDKがすっぽり入ってしまうことしばしば。第一、カリフォルニアの中に日本が入る。「方丈」という狭い空間の中からこそ、茶道、華道、書道、禅、俳句などなど、日本の精神文化を代表する芸芸、宗教が生まれたのだと、なぜ日本のマスコミは大いばりで世界に反論しなかったか。

のんびりとゆとりのある家に住む。国民全体が一人残らずそんな境遇になるというなら文句も云うまい。だが——「働きすぎ」という批評——直ちに週休2日制。土・日休んで家庭サービス。収入はそのまま、疲労と出費が倍増した。「ウサギ小屋」——ホイ来たとばかりに公団は起豪華な公住マンション。私どもには手も出ません。あれよあれよという間もあらばこそ、日本は官民一体、こぞって外国からの批判をおし頂き、時間と空間を拡大するためにあくせく働いたのではなかったか。

閑話休題。ライシャワー駐日大使離日の弁は、「日本の大臣を含む政治家で、私と一対一で英語で議論できる人は一人もいなかった。もっと英語教育に本腰を入れなくては」であった。日本語が国際語でないのは残念だが事実である。相手が無言の腹で来ないのなら、相手に日本の腹を示すには、言葉という相手の土俵で相撲をとるしか方策はない。相手を分

かり、こちらを分からせるには、言葉以外に伝達の手段はないのである。剣ではなくてペンなのだ。

手出しさえしなければ、いくら激しい言葉のやりとりでも、暴力ざたには発展しない。言葉のやりとり、言葉に対する信頼は欧米のお家芸。それをこちらに取りこむしか方法はない。刀を抜けば負けだ。

物質文明の同化吸収とは違って、精神構造の違いを乗り越えるのは困難だ。島国日本という立地条件もある。しかしそれはわれわれの将来の努力に関わることもある。語学修得という技術的に解決可能な方法も現にある。一対一で異国の市民が激論を交わし、友達になり、その輪を広げることもできる。異邦人でも親しくなれば、最少限の言葉で腹の中も分ってくるし、第一に連帯意識も生じてくる。信頼する友人のことを、「ピラニア」だとか「コブラ」だとかのしる人間がどこにしよう。

理想主義呼ばわりをされるのは覚悟の上で始めたのが、文化交流誌「道」（発刊1978。山口書店）である。プリンストン大のオール・マイナー（日・英文学）、ロンドン大のチャールズ・ダン（日本文学・日本学）という海外編集者、同僚の風呂本武敏、渡辺孔二、西光義弘という協力者を得て、現在では英米以外にアフリカ、エジプト、西独からも投稿原稿が来るようになった。

政治、企業、学界レベルの交流計画ではカバーできない市民レベルの草の根交流が目標である。日常生活、外国人との接触による体験、日本人・日本文化、外国人・外国文化の分析など、折にふれて気づいたことを気軽に投稿して頂ければ幸せである。日本語、英語を問わない。（問い合わせ先：森研究室）（英語）

（「道」誌の発刊や外国人に剣道を指南するなど日本文化の紹介と国際親善に貢献した功績——剣とペンの二刀流？——により、本年3月森晴秀氏は、フランス総領事アンドレ・ブルネ氏とともに神戸ロータリークラブから表彰された。編集部）

なんとなく「たうろす」

川端 柳太郎

の木内孝、山縣照、教養部の小島、川端、それに卒業生、在学生が何人かいる。とくに木内の「点描詩篇」の連作、山縣の小説などは色々な意味で興味深い。

雑誌「たうろす」がただなんとなく続いているのに反して、個々の同人はそれぞれの場で、意欲的な仕事をしている。小島輝正『春山行夫ノート』多田智満子『運喰いびと』『鏡のテオーリア』、安水稔和『異国間』『歌の行方』など、画期的な作品が続々と出版されている。新旧同人が出した本を並べれば50冊は下らないだろう。

現在「たうろす」は年二回発行している。このままのペースでいくと、3年後には50号が出ることになる。かって二宮尊道追悼記念号(27号)や30号記念号を出して物議をかもした編集者としては、この折にちょっと派手なはずらしてみたい。なんとなく「たうろす」も、たまには目を覚ましてはと、秘かに企んでいる。(英語)



詩と評論、それに小説などを載せている同人雑誌である。新聞で「同人誌界一方の旗頭」と書かれて驚いたり、あまりにも人目に触れないので、「幻の同人誌」といわれたりしながら、妙に永続きのしている雑誌である。さしあげると、「へえー、まだ続いているの?」という挨拶を受けることもある。

昭和28年「ヴァイキング」から分離して発足した「くろおべす」がそのはじまりであり、当時は井沢義雄教養部長も参加していた。「くろおべす」は同人の印象的な死を契機として、36年、43号でその幕を閉じた。その頃の同人はひとしく「雑誌の命運尽きるの感を覚えた」らしいが、38年に「たうろす」として蘇った。「くろおべす」(泥棒)は、海賊「ヴァイキング」の向うをはってつけられたが、「たうろす」(雄牛)は、ただなんとなくつけられたような気がする。詩神ともいうべき昂(すばる)の官女たちを守って、金牛宮で巨人オリオンに立ち向うtaurusとこじつけられなくもないが、むしろだからと続く牛のよだれといった実感の方が強い。

「たうろす」は今年の六月に44号を出したから、旧「くろおべす」の発行数43号を越えたことになる。しかし「くろおべす」が43号を出すのに8年、「たうろす」が44号を出すのに20年もかかっている。その創造的エネルギーの差はあまりにも甚しい。「世に惰性ほど持続力と推進力に富み、かつ生産的なエネルギーはない」と書いた発行人小島輝正のことが(30号)が、案外「たうろす」永続の秘密を語っている。とくに27号から編集を引受けた川端柳太郎は、この小島の意図を忠実に守って「すこぶる退嬰的な編集」を続けている。なんとなく原稿が集まり、金が集まるから出ているのである。「とくにエコールとしての主張はない」(『日本近代文学大事典』)といわれるのはもっともであるが、「いかに神戸的な都会性ある雑誌」といわれると、ほんとかしらと面映ゆくなる。

同人数は現在26名、創刊以来多少の出入りはあるが、ほぼこの規模で続いている。当然の事ながら、同人の平均年齢は高令化しているが、不思議なことにも20歳代の同人がいる。30号(49年)当時、最高と最低の年齢差が35歳であったのが、現在は40歳になっている。「老令同人の気が法外に若いのか、それとも年少同人の精神が早くも老成に達しているのか」(小島)、とにかく不思議なグループである。

神戸大学とはあまり関係ないが、同人には文学部

三号誌と呼ばれて久し —「兵庫のペン」15号を出して—

風呂本 武敏

遠い記憶で正確ではないが、学校を出た頃の頃に東北を一人旅したことがあった。ロマンチックにもこの想う年頃にふさわしく、名にひかれて弘前に下車し城跡の散策を楽しんだ。桜にはちょっと早い頃であったが、やわらかい陽ざしと濠端に行く和服の女性の何とも言えぬ落ち着いた調和に見られたのを記憶している。多分素敵な美人だったのだろうが、今日では顔の輪郭などはぼやけて、その情景とそれに対して感じた印象の快感だけが鮮やかに残っている。それから十数年へだてて、イギリス中部の中都市チェスターでも似たような経験をしたことがある。中世の城壁に囲まれ、ロウと呼ばれる二階造りの商店街を持つこの街の魅力は作家ヘンリー・ジェイムズも描いている。これら高度に文化的な中小都市はそこに住む人々の自足した落ち着きによって、街の魅力をいやましている気がする。

1976年6月、十名ばかりの仲間が集まってローカルな特色のある文化誌を出そうと決心した時、各自の胸の内には型はちがっても何かこのような自足し得る地方文化への憧れが共通していたのだと思う。詩人、教師、文化運動家、誰も余りお金には縁のない者ばかりであったが、多くは何らかのサークル活動に参加し、身の囲りに一定の仲間をかかえている強味があった。

当初は百名位の賛助会員を基礎に1500部発行の季刊誌として構想し、ローカルな話題と毎月特集を組む方針でのぞんだ。また発刊の趣旨としては、なるべく広く誌面を読者に開放するが、一つの性格づけとして、平和と民主主義と科学的態度を重視することにした。これは予想される論争について最少限のワク組として考えたものである。

15号まで来た特集については、以下のようなテーマが並んでいる。兵庫の文化運動戦後30年、1930年代の兵庫県に於る弾圧と抵抗、兵庫と国際交流、兵庫の若者、子供の非行問題、闇市の記録、消費者運動、都市開発、過密過疎、県下の戦時中等教育など。これらについては大方の批評は着眼点はまずまずだが、突っ込みがまだまだ不足しているという批評である。ただ、以下に述べる記事をも含めて、この雑誌の特色は未熟ながらも自分の足で歩き自分の目で確かめたことを書くことにあると信じている。

5年の歳月はしかしながら、編集委員個人や雑誌の誌面そのものに幾つの変化をもたらしたのも否定出来ない。余儀ない事情で委員を辞任された方、

新らしく加わっていただいた方などの交代で、当初からのメンバーは三人だけになった。勿論これは成長ととるべきで、当初はゼロであった女性委員が今日ではむしろ主力部隊として活動していただいていること、年令的にも若手が中心になりつつあることなど。また誌面にしても、幾つかの定まった記事が定着し、取材や版組みが安定して来たと言える。

姫路の木きり絵作者、岩田健三郎氏の絵と文は巻頭を飾る人気シリーズであるし、花房健次郎氏の兵庫文化メモは他に類のない視点から兵庫県の文化行事を追跡して好評である。小説をという要求があるが、これは感動的な作品で適切な長さ(印刷費ともからんで)のものの発掘がむづかしくレギュラーの頁になっていない。その代りの読み物として、兵庫の先行者ということで、三木天遊、富井於菟、竹橋事件の兵庫県殉死者、城ノブ、阿部知二、久留弘三、孫文などを採り上げた。さらにレギュラー記事としては個性的な活動の故に魅力的な女性を訪問する『インタビュー』、「表現」の問題をめぐって、創作方法を論じる作家・画家・音楽家・批評家などの『対談シリーズ』などもある。これらを通して編集部のいささかの自慢はちょっと先見の明があったことで、我々が採り上げてからしばらくして全国的ジャーナリズムが問題にした幾つかのテーマや人物があることである。

相変らずの赤字財政で、未だに執筆者には無料奉仕をいただいているが、15号まで続いた余得としてファンの方も現われ、原稿や広告や販売についても少しづつ上向いていると言えそうである。ただ編集委員の力量の飛躍的アップはむづかしいのが今後の最大の課題と言えそうである。

そして今日の時点で15号までをふり返れば、仮にもしも15号で廃刊して百万の赤字が残ったにしても、編集委員の間の友情、誌面を支えていただいた方々との交友、これは失うことも消し去ることも出来ない貴重な財産といえそうである。(英語)

名曲を求めて

井上 健



段としてすぐれた実績をあげてきたのは事実にしても、比較文学という若い学問の有する可能性をそこにのみ限定してしまうことはできない。ではそもそも比較文学とはいかなる学問であるのか。現在の僕には文学・文化研究の一つの態度とでも答える他はない。文学現象を可能な限り相対的な視野で捉えようとする、作家や作品を論じる際に通時的観点と共時的観点を有機的に絡み合わせていく—そんな精神で眺めたとき、対象が従来の研究方法によっては得られぬ相貌を顕してきたとするなら、それこそが比較文学研究の成果と呼ぶに相応しいものなのではあるまいか。今後ともそのような態度、精神で、アメリカ文学や日本文学を研究していきたいと思う。そして、この神戸の地で、神戸大教養部の自由な空気の中で、「比較文学的」なPoe論を書き上げたいと決意している。

最後に趣味についてふれることにする。映画、絵画鑑賞、アーチェリーなどあれこれ手を出しているが、一家言を有するに至ったといえるのはレコード鑑賞のみであろう。生来、音楽にはジャンルを問わず意地汚く耳を傾ける方であるが、レコードを購入するのは殆んどクラシックばかりである。アルバイト代を注ぎ込んだ学生時代から10年余、買ったためたLPレコードはとうに400枚を越え、年内には500枚に達しようとしている。作曲家別ではBach, Mozart, Beethovenといったところがベスト・スリーで、それに続くのがSchubert, Brahms, Schumannあたりであろうか。フルトヴェングラーのBeethoven, カザルスのBach, 若きリリー・クラウスのMozart, ヴンダーリッヒの歌うSchubert, Schumannあたりが僕のお聴きである。学生時代は新宿の「らんぶる」や本郷の「麦」などの名曲喫茶に通いつめたものだが、大阪には通うに値する名曲喫茶はない。幸にして、かつて梅田新道で営業していた「日響」が岡本に撤退したという話を耳にしたので、一度途中下車して訪れてコレクションの質を吟味してみるつもりである。

(英語)

本と業

倉沢 行洋

「今日、デパートの古本市へ行ってね、こんなものを買って来たよ」

ある時、小林太市郎先生が、古ぼけた和とじの本二、三冊を示しながら言われた。

「僕はもう若くはないし、心臓の持病もあるから、こういうものを買っても生きてる間に読めるかどうかかわからないと思うんだがね、そう思いながらやっぱ買ってしまおうんだ」

その言葉を聞きながら、私は、学者の「業」ということを思った。

これより少し前、何の折であったか忘れたが、西谷啓治先生が、晩年の西田幾多郎先生のことにふれて話をされ、「思索と著述に明け暮れる西田先生の姿に、業を感じた」という意味のことを語られたことがあった。小林先生の買われた本を見ながら、私は、そのことを思い出したのである。

小林先生は、それらの本を買われて間もなく、結局それらを読まれないまま、他界してしまわれた。

小林先生や西田先生のごとく、死に至るまで本を買い、思索し、著述する学者、世の多くの人は、そういう学者の姿に、真理への崇高な使命感を読み取って、感動し、讃歌の言葉を贈る。だが学者自身は、たいていの場合、そんな崇高な使命感のみを動機として学問しているわけではない。根本的には、学問せざるを得ないから、学問するのである。学問していないと心が安まらぬから、学問するのである。彼の内なる深い欲求が、彼に学問するよう強いるのである。それはまさしく業である。すぐれた学者ほど、そういう業が深いとも言える。

こゝに業というのは、突きつめていけば、「考える」(もしくは「考えざるを得ぬ」)ということになる。いつも考えていないと心が安まらぬ。安まらぬからまた考える。考えるために本を読んだり、著述をしたりする。学者とはそういう人間である。西田幾多郎先生はいみじくも言っている。

「思索などする奴は緑の野にあって枯草を食ふ動物の如しとメフィストに嘲らるるかも知れぬが、我は哲理を考える様に罰せられて居るといった哲学者(ヘーゲル)もある様に、一たび禁断の果を食った人間には、かゝる苦悩のあるのも已むを得ぬことであろう」(『善の研究』)

だが、考えざるを得ぬ業を抱き、もしくは考えるべく罰せられているのは、何も学者だけではない。人間は誰でも、人間である限り、考えることから逃

れることはできない。

人間を「考える業」と規定したパスカルは、考える力をもつことに人間の偉大性のしるしを見た。だが、別の角度から見ると、考える力をもつことは、人間のあらゆる苦悩(苦痛ではない)の源泉でもある。

あなたは、何事かについて、「そんな事はもう考えたくない」と思ったことはないであろうか。多分あるであろう。そしてあなたは、その時、考えたくないと思いつつ、やはり考えてしまったのではないかと。それが人間なのである。考えれば苦しくなるとわかっていても、考えてしまう。考えるが故に、惑い、悩む。人間とは、そういうものなのである。

ある人が、野に遊ぶ獣、空とぶ小鳥たちを眺めながら、妬ましく思った—人間のごとく考えることなく、ただ本能の命ずるまゝに、空腹になれば食べ、時来れば生殖の営みをし、疲れれば眠り、目ざめればまたとび遊ぶ。悩みも惑いもなき、この無垢な幸せから、なぜ人間のみが疎外されているのか、と。彼の胸は、失われた楽園への郷愁にいたんでいるのである。だが、ひとたび禁断の知恵の木の実を食べて、「考える業」(というよりは「考えざるを得ぬ業」)となった人間には、楽園の無垢な幸せは、もはや決して戻ることがない。

人間はみな、こういう業を抱いて生きている。本を書くのも、読むのも、業である。業の無い人はいない。だが、人によって業の深淺ということはある。学者というのは、たぶん人なみに以上に業が深いのであろう。中でも小林先生や西田先生は、ずいぶん業の深い人であったに違いない—と、両先生の著書を読むたびに、私は思うのである。(芸術学)

十二年ぶりの関西暮らし

谷本 慎介



六月某日、ドイツ語科のさるトラキチの方と甲子園球場へ観戦に出かける予定だったのが雨で流れてしまいました。高校二年のとき、夏の高校野球大会でアルバイトをして以来十三年ぶりの機会を逸してしまいました。関西に住んでおれば行きたいときに行けるわけですから機会を改めてとは思いますが、優勝が決まってからはつまらんし……。高校を出てから十年間東京にいた間に後楽園球場へは十回以上、横浜球場へもわざわざ一度出かけましたが（神宮球場へは勝つ気配すら感じられないので一度も行く気が起こりませんでした）、阪神が勝ったのはたった一度だけでした。思い出すのは、江夏が投げれば長島や王がホームラン、堀内が投げれば田淵は自分が坐っているジャンボ席の方へ特大ファウルか三振、こういう屈辱なシーンばかりです。また来年を期待したいと思います。

七月某日、対阪大一大教大連合独語独文教師チーム、阪大独文科学生チームソフトボール定期戦。ぼくは三番でセンターという晴れ舞台なのに、守ればチョンボ打てば凡打の連続でチームの勝利に貢献できないどころか迷惑ばかりかけてしまいました。あまり阪神の悪口ばかりも言っておられません。小学生時代は学校や家の近くで友達としょっちゅうソフトボールをしていたのですが、中学高校の六年間は柔道に身を入れていたためたぶん野球ボールに触る機会もなかったのではないかと思います。秋にはまた別のソフトボール大会もあると聞いていますので、今度からは準備怠りなくせいぜい練習をつんで試合に臨むつもりです。

ぼくは生まれてから高校卒業まで大阪で育ったので、今春から十二年ぶりの関西暮らしということになります。まだ神戸の町はほとんど知らないし、その他未知のものが至るところにありそうなので、旺盛な探求心と冒険心だけは失わないであたらしいものごとに接してゆきたいと思っています。

(独語)

三月三十一日夕刻まで前任地熊本での仕事をちゃんと終えてから（ビール飲むのも仕事のうち）、ブルートレイン『明星』号で（熊本～三宮間は十一時間足らずで夜行列車としてはあまり乗りがいがありません。熊本～東京なら『はやぶさ』で約十八時間、こちらは十分乗りがいがあります）四月一日早朝三宮着、約束の十一時より少し前にドイツ語共同研究室に赴いたところドイツ語科のさる長老の方が真顔で開口一番「十時に学長に逢うことになっているのに遅いじゃありませんか——えっ！ギョッ！あれ！？ほんと？ほんまかいな——うそでした。

その日はじめての帰り道、馬場の脇を通り工学部の建物に沿って行って突きあたった所で、まっすぐ道なりに行くべきか運動場の方へ右に折れるべきかわからず、ふと傍のベンチに坐って日向ぼっこをしていた（たぶん）留年生風の年齢不詳の男性に道を尋ねたところ、「まっすぐまっすぐ！」と言うのでそのとおりにしたら——阪急六甲まで半時間以上もかかってしまいました。

大阪市の南の僻地、阿倍野にある自宅から学校へ通うのに、梅田までは環状線、地下鉄御堂筋線、谷町線の三通り、梅田からも阪神、阪急、国鉄の三通り、順列組合せで何通りの通学方法になるのかわかりませんが、四月からの一学期間その日の気分その他しだいでいろいろ乗りわけたつもりなのにまだまだ飽きがきそうにありません。

五月某日、かねてから観たかったS・キューブリックの大昔の作品「博士の異常な愛情」をやっと観ることができました。開高健が絶賛していたわりには、ひきつけを起こさせるほどのブラックユーモアとも思えませんでした。それでも久しぶりに会場の雰囲気ともどもおもしろい映画を堪能することができました。ぼくはこの四月まで二年間熊本にいたのですが、はじめての地方都市暮らしで映画館の少なさには少なからず驚かされました。しかしテレビやラジオのチャンネルも少ないし、第一地元新聞以外には夕刊のない地方なのだから当然といえば当然ですが、ロードショー用の映画館はそろっているくせに、あと二つの名画座とピンク映画館以外、二、三番館が皆無なのはやはり往生しました。もちろん文明が開けていない分だけ、そういう土地には独特の文化の香りらしきものが遺されているようには感じられましたが。しかしなにはともあれ映画や演奏会などの文明的刺激物にはこれからは存分に接することができそうなのが楽しみです。

山 登 り

宗 像 恵



この春から、哲学を担当いたすことになりました。どうぞよろしく願いいたします。

私の生まれまされたのは東京都下の住宅街で、生家は今はもう道路整備計画のあおりを受け、産業道路になってしまい訪ねる術もありませんが、その頃は板屏や生垣に挟まれた小路がみな子供の遊び場というような、こぢんまりとした所でした。その後一度転居しましたが、そこは同じ私鉄で二駅ほど郊外の当時の新興住宅地で、周辺はまだ近郊農業地帯の名残りを留めていました。畑の中に島々のように浮かぶ屋敷林、廃れだした漬物工場の庭に幾つも転がっていた大きな木樫、子供の眼には立派な牧場に見えた小さな放牧地に繋がれた乳牛たち、こんな風景が今でも親しく想い出されます。

もちろん、東京に住む者の常として、こうした牧歌的な風景はたちまち姿を消し、中学・高校と進むにつれ、オリンピック工事以来急速に様変わりしていく町並を、超満員の通勤電車の窓越しに垣間見ながら、新宿・渋谷の繁華街をとおって通学することになり、この頃の気忙しい感じから、いまだに抜け切れないような気がします。そして大学紛争のさなか、昭和44年に京都大学文学部に入学いたしました。

封鎖・抗議集会・衝突と学内は騒然としており、入学後半年間は授業もない状態の中、思いがけず色々と考えさせられました。他方では自然と文化の調和した京都で、感性が蘇生させられる思いをしたりしました。以来10余年間、良き師、良き友人に恵まれながら、昭和48年文学部哲学科を卒業、続いて同大学院修士課程・博士課程を経て、昭和55年4月より一年間、研究室の助手を務め、本年4月に本学に移って参りました。

大学入学当時は、自己意識から客観的精神に至るまでの精神現象の展開を、弁証法の力により説明し去るヘーゲルに魅力を感じたり、知性の分析を退け直観により捉えられる生の躍動を説くベルクソンに惹かれたりしましたが、結局は、分析的知性そのものを確認することに向かい、古典的17世紀合理論を学ぶことにいたし、野田又夫先生の御指導を受け、デカルトの哲学について論文を纏めて卒業論文といたしました。大学院においては、野田先生が退官された後、辻村公一先生、木曾好能先生の教えを受けながら、スピノザ、ライプニッツと合理論の系譜を辿り、現在はイギリス経験論と対照させることによって、知性と経験の関係を改めて確かめたいと思

っています。

デカルトは自ら「暗闇の中を歩む者のよう」と言っているように、若い頃の普遍数学の着想以来、自らの確立した方法に従って独力で新しい学問体系を築き上げようと努めた人であって、主意主義的と言われるように、彼の知的活動は常に意志的判断によって支えられており、知性をいわば秩序を創り出す意志と化している。スピノザはその点では自然主義的であり、心身の平行関係を認めて自由意志を否定するが、しかしやはり古典的合理論者として知性を身体的想像・感覚から峻別し、「永遠の相のもとで」事物を見るという知的活動を倫理に直結させる。ライプニッツは知性の働きにおいて記号の果たす役割の重要性を洞察し、普遍的記号術を創案して一切の論争を論理計算によって解決しようと目指す。そしてこれらの人達の対極にヒュームがいる。彼は知的活動における判断、一切の信念を感情の働き、「或る特異な感じ」に還元しようとする。

こうした思想家たちの体系を、個々に検討すると共に全体的な展望を得る、という目標を掲げるとしても、達成にはほど遠く、まだまだ基礎作業をしているにすぎません。山登りに喩えると、まだ樹木の多い山裾を歩いて木立ちの間に見え隠れする尾根を見上げているような状態ですが、こうした自分の状態とは裏腹に、すでに頂に居て下界を見渡しているような明かるい風の吹く神戸大学に参りまして、研究の山登りのほうを根気よく続けていきたいと思っています。

(哲学)

わが教養時代

米本 弘一



4月からこの教養部で英語を教えることになった。3月までは大阪大学大学院の学生であったので、教師としては正に新米であり、本格的に教えるのは初めてと言ってよい。そういうことで、夏休みまでの3ヶ月ほどの間は、様子もわからず、緊張することも多く、学校では何となくこわい顔をして歩いていたのではないかと反省している。しかし、学生と同じく、教師もまた成長するものである。授業がこちらからの一方通行となることなく、共に学ぶという形のものとなるように努めたいと思う。

私が阪大に入ったのは、昭和47年のことであつたから、今の教養部の学生から見れば、ちょうど一昔前ということになろう。このたび教養の学生と接するようになって、自分の教養時代の事を思い起こして、くらべて見ることが多い。これは、英語科では年齢的には学生が一番近いところにあり、同時にある程度の距離を置いて見ることでできる位置にあるためであろうか。本質的には一昔前とあまり変わっていないようで、学生は概して真面目であり、適度に勉強もしている様子である。ただ、学生生活を自由に楽しもうという雰囲気はより強くなっているように見受けられる。他の大学は阪大しか知らないのがこれが神戸大学の特徴かどうかはわからないが、これはこれで結構なことである。しかし、ただ単に楽しく過ごすのではなく、その中から何かを得てほしいと思う。授業で学ぶことももちろん大切であるが、授業で教えられることは限られている。自分で自主的に学び、考える態度を身に付けてもらいたいと思う。特に教養部時代はそれにふさわしい時であると思われる。そこで、私の教養部の頃のことを少し書いて見ようと思う。何かの参考にならば幸いである。

授業は大体神妙に受けていたと思う。しかし、授業の事よりも、やはり、それ以外の経験の方がよく記憶に残っている。中でも、文学部の同級生数人と始めた同人雑誌のことは、今から思えば稚拙なものであるが、特になつかしく思い出される。これは、文学作品をただ読むだけではつまらない、何か創造的な行為によって形に残そうという不遜な考えの人間が集まって作るようになったものである。授業で知り合った他の学部の人間にも賛同者が現われ、結局メンバーは10人ほどとなった。誌名は相談の結果、仏文学志望の男が提案した「Tout est fini」と決まった。「万事休す」、もう駄目だ、おしまいだ、

という所から何かが生み出されるという発想であつたらしい。

それぞれ詩でも小説でも評論でも好きなものを書いて来て、原稿がそろったら、雑誌の形にして出すということになった。会費は一応集めたが、それでも資金不足で、なるべく安上りに済ませるために、最初は謄写版印刷にした。それも、書いた本人が原紙を切るという決まりであつたから、短い詩ならともかく、小説など書くとき大変で、締切り間際には徹夜をしなければならなかつた。それを印刷するのがまた一苦勞で、印刷機を持っていないので、いろんな所で借りて回つた。その印刷機も、一枚づつ手で刷り上げる原始的なものであつたので、やたらと時間がかかり、これまた徹夜となつた。ある時、寮の印刷機を借りて、二人がかりで刷っていると、でき上った時はもう朝であつた。その日は一時間目に体育の授業があつたのだが、寮のすぐ下にグラウンドがあつたので、律義にもそのまま授業に出て行つた。手をインクでまっくらにして、ふらふらになつて出て来た二人の学生を見て、体育の先生は大いに不審を抱いたことであろう。今から思えばバカなことをやっていたものであるが、こういったバカな情熱を失ってはならないと思う。

でき上った雑誌は、次号の資金の一部とするために同級生を中心に売って歩いた。おもしろがって買ってくれる者もいたが、大体売れ行きは悪かつたようである。図書館に一冊持って行って置いてもらおうとしたが、司書の人に「これは一体、本でしょうか」と言われ、がっかりしたこともあつた。この時の経験があるので、今でも若い学生が同人誌など持って来ると、同情してつい買ってしまふようなことになる。

この雑誌は、三号まで出した所で「万事休す」となつて、文字通りカストリ雑誌となつてしまつた。しかし、その時の仲間の何人かとは今でもつき合ひがあり、気心の知れた悪友となつている。(英語)

教養部にカムバックして

富田 暹



広報委員長から、本年4月の人事異動を受けた一員として、自己紹介をとの依頼を受けたものの、すでに、51年の春から54年までの3年間、教養部でお世話になり、いわば古巣にカムバックしたかたちです。あらたまったの挨拶も何か面映い感があります。

したがって、教養部を離れ、今春までの2年間の付属農場における体験のつれづれを述べさせていただきます。

農学部付属農場は、六甲台キャンパスから約70km離れた播磨平野のほぼ中央部にあり、国鉄を利用して通勤すすれば、山陽本線・加古川線・北条線と乗り継ぎ、2時間半以上は優にかかるため、止むを得ず単身赴任を決意しました(このことは、私自身にとつとも30数年動続のなかではじめての経験です)。

幸い、私自身多少の趣味といえますが、生来、土いぢりが好きなため、農業に大変興味をもっていましたので、短い期間でしたが、数々の貴重な体験と、楽しい充実した日々を過ごすことができましたことは、水野農場長をはじめ農場の方々の暖かいご支援とご協力の賜物と感謝しております。

ご承知のとおり、付属農場は、学部の学生実習、研究の場として重要な役割を果しているわけですが、農場経営といえますか、企業経営的な厳しい、一面も教えられました。

そのなかで、農場近代化の施設・設備の充実を計るため、計画立案から実施まで、多くの方々のご援助により見事に結実したことも、今は懐しい思い出となっております。

自己紹介

根岸 松子

4月1日付で教育学部学生掛から教養部庶務掛へ配置換えになりました。教養部の大世帯の中ではじめての庶務掛の仕事は私には重荷で当惑しましたが、皆様の御指導よきを得て、年度当初4・5月の仕事の輻輳した時期を無我夢中で何とか乗り越えて、今ではやっと冷静に自分の仕事をやって行けそうな見通しとなつてきました。今後共皆様方の御指導御鞭撻を仰ぎながら、出来るだけ仕事に真摯に取り組んで行く所存です。

ほんの少し私の性格・趣味について述べさせていただきますと、私は西宮市で生まれ育つた生粋の「西宮

また、私にとって、農場経験は、二つの貴重な教訓を得ました。そのひとつは、ごく普通のことですが、一粒の米、一個の果実も厳しい自然条件とたたかひながら、そこに働らく多くの人々の、文字どおり汗の結晶から生まれでたことを自分自身の眼で確かめ、かつ、そのよろこびを分かち合えたとき、はじめて物の尊さを痛感せずにはいられなかつたことです。

いまひとつは、普段はあまり考えることの少なかつたことですが、家族と離れ、家庭というものの大切さをしみじみと考えさせられ、自己修養に大いに役立ったことも大きな収穫でした。

以上、支離滅裂な文章になってしまいましたが、皆様方のご指導、ご叱責をいただきながら、教養部の発展充実のために微力をつくす所存ですので、よろしく願い申し上げます。(事務長)

っ子」です。神戸大学は六甲の風光明媚な所で人柄もよく女性にとって居心地のよい最適な職場で腰掛けの積りが結果的には長く居着いてしまつております。性格は至って温厚・聞き上手の話し下手で消極的な性格です。

趣味は手芸・旅行・スポーツをすることが好きです。何をしても腕前はもう一つですが健康増進と気分転換に役立つパドミントン・卓球・テニス等何でもやりたく思っていますから又お誘い下さい。お願いいたします。(庶務掛)

山本博子

教養部の図書館に来てから、もう半年になろうとしています。ここは眺めが良く、私の机も海の方に向けて貰っています。夜間当番の日は夜景が唯一の楽しみです。でも冬の寒さを思うとぞっとします。

図書館の仕事は、専門性を求められることがあり、その度に、先輩方に聞いて、その即答性と正確さに感じ入っています。私も早くあんな風になりたいと思っています。先生方も利用されますが、ほとんどの先生の名前を知らないの、返却される毎に、「お名前は何？」と尋ねなければなりません。多くの学生を相手にしていると、いろんな学生がいておもしろい。退屈している時に、そういう学生が来ると、清涼剤になります。この仕事をしていると、少し気が長くなったように思います。待つということに対して、忍耐強くなる仕事ですから。

図書館に来たことのない人、1度来てください。メガネ越しに見つめられたら、それが私です。私の趣味は、音楽鑑賞。ニューミュージックとクラシックが大好きです。21才の未婚女性です。どうぞ今後共、よろしくお願ひします。(図書館保管運用掛)

石田 司

今年、短大を卒業して、4月から教養部でお世話になっています。すべてが、初めてのことばかりでいろいろ戸惑いましたが、まわりの方に助けていただいて、何とかガンパッテしています。これからもどうぞよろしくお願ひ致します。

図学教室はとても遠いですが、一度、昼休み等に、来て下さいね。(図学教室)

安井 玲子

4月16日、龍神さんのあとがまととして整理掛におじゃまするようになりました。少しずつ仕事を覚えてきてもう4ヶ月が過ぎようとしています。自分なりによく続いたと思っています。

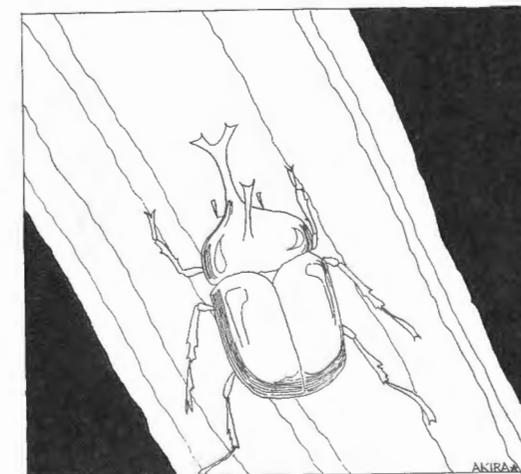
私は3時に仕事を終えて帰ります。ほとんど歩いて阪急六甲までおりののですが、桜の木の下を歩いたり、三の宮方向や、海をみおろしながらフラフラと帰るのは眠けもさめ、爽快そのものです。

土地的な環境の良さはさながら人間関係においても、大変恵まれて、今とても幸せな気分です。

先輩の方々にお話をうかがっていると毎日毎日、勉強になることばかり、考えさせることもよくあります。無気力に学生時代を過ごした私にとって、これからは……と意欲だけはそそられ、あせている今日この頃です。

最近髪を切って若くみえると自分で考えて満足しています。おみかけになられましたら、一言「今日歩いたの」とおたずね下さい。“歩かなくては”と責任感に燃えるよう……。 (若さを保つように)

(図書館整理掛)



加古道雄

B5大の白いタイプ打の紙、これを頂戴し4月1日付教養部へ配置換えとなりました。最小の組織(附属住吉校1掛)から、最大クラスの部へ、の異動は少し戸惑いましたが、仕事の師となる良き先輩を得これからも大いにガンパッテします。

又、教養部はスポーツ活動もさかんで、運動不足に陥っていた私など誠にもって感謝、感謝の次第です。(用度掛)

山本 公一

昭和56年4月1日付で用度掛へ配置されました。用度掛といえば、主に契約・物品管理の職務を携わるわけですが、教養部というところはなにぶんにも学生数・教官数・諸施設が多く、文化系・理工系が一つの集団となっていることから、我々の仕事も範囲が広く、非常に忙しいところであると聞いております。

現在、教養部へまいりましてから5か月経過しましたが、実際に自分が用度掛の仕事を経験して、何となく前任者が“忙しいところである”と言われた意味がわかってきました。というのは小規模な工事・修繕がやたらに多く毎日走り回らねばならず、常に席について仕事をするといいことがないからのようです。しかし、前任者をはじめ歴代の方はこのような状態で十分に職務を全うされていったわけですから自分も精一杯がんばりたいと意気込んでおります。こんな私ですがよろしくお願ひします。

(用度掛)

藤原 稔

20数年前に(1)環境が抜群に良いこと、(2)大学のアカデミックなところが気に入ったこと、(3)スポーツ諸施設が整っていること、等で神戸大学に就職しました。

当時、まだ教養部は設置されてなく、御影分校(神戸市東灘区御影町)、姫路分校(姫路市新在家)の時代で農学部、医学部も国立移管されていなかった。

昭和38年4月に教養部が設置されましたが、学舎整備の途上で雨が降れば、あちこちでひどいぬかるみだったことを覚えています。現在の教養部と比較すれば雲泥の差があります。

昭和43年に神戸大学の紛争がございましたが、このことは私にとって強烈な印象として残り、私の貧弱な人生観、人間観にも大きな影響を与えました。

最後に、私の主観的な神戸大学学生気質を要約します。(1)人間としてこせこせしない、どちらかといえばのびやかである。(2)社会に出るとややロー・スターの傾向があるが、豊かな能力と大きな可能性をもち、他大学出身者を追いつく長距離ランナーである。(教務掛)

中嶋 みどり

今日は9月1日、教養部に勤めるようになって、はや5ヶ月が過ぎてしまいました。大学に入学し、初めて教養部に来た時の驚き、あり余る程の自由と解放感、しかし、テニス部にはいった事で、私の生活は一変してしまいました。授業に出れるのは、語学と体育だけで、ほとんど毎日が練習。練習時間も授業と関係なく決められているので、授業のある時は、途中で練習をぬけて、体操服のままで六甲台から降りてきて授業を受け、終わればすぐコートへもどって練習。練習の合間に授業に出ている、という感じでした。今、あの頃の事を思い出すと、しんどかったけれど、なつかしさがこみ上げてきます。

ところで、私はテニス以外に興味といえば、ピアノをひく事と編み物をする事ぐらい、というごく平凡な女の子です。まだまだ学生気分がぬけず、何もわかりませんが、笑顔を忘れずにやっていきたい、と思っています。今後ともよろしくお願ひします。

(社会科学教室)

広山 芳子

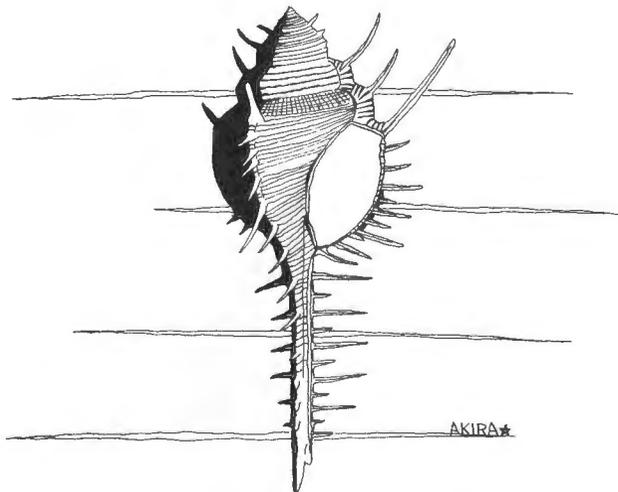
この春、松蔭女子学院大学文学部国文学科を卒業し、現在、体育共同でお世話になっています。女性ばかりの環境から一変、男の先生ばかりの中に飛び込んで来たわけですが、初めは、こわいような、恥ずかしいような、そして少し嬉しいような気持ちでしたが、今ではすっかり慣れました。しかし、まだまだ学生気分が抜けきらず、子供っぽい私です。でも、自分の手でお給料がもらえるようになったことが、唯一の社会人として自認できることです。お給料日には、必ず、ケーキを買って帰ることにしています。自分の働きによって、お金がもらえるということは、気持ちの上でも、ゆとりができていいなあと思っています。これからもよろしくお願ひします。

(体育教室)

人事異動

(56. 9. 10)

| | | | |
|-----------|--------------|--------|--------------|
| 56. 3. 21 | 保管運用掛事務補佐員 | 細見 崇子 | 3月20日限り退職 |
| 56. 3. 31 | 図学教室技術補佐員 | 高瀬 弘子 | 3月30日限り退職 |
| " | 整理掛事務補佐員 | 龍神 啓子 | " |
| " | 臨時用務員 | 渡久地 政義 | " |
| " | 警務員 | 納村 稲国 | 退職 |
| 56. 4. 1 | 事務長 | 大野 喜代士 | 医学部事務長へ |
| " | 教務掛長 | 妹尾 正己 | 厚生課長補佐に昇任 |
| " | 教務掛文部事務官 | 三金 康宏 | 医学部教務学生掛へ |
| " | 用度掛文部事務官 | 中尾 功 | 附属病院経理掛へ |
| " | 事務長 | 富田 暹 | 附属農場事務長より |
| " | 教務掛長 | 藤原 稔 | 厚生課厚生掛長より |
| " | 学生掛主任 | 岩井 たい | 昇任 |
| " | 庶務掛文部事務官 | 根岸 松子 | 教育学部学生掛より |
| " | 用度掛文部事務官 | 加古 道雄 | 附属住吉校事務掛より |
| " | 用度掛文部事務官 | 山本 公一 | 経済経営研究所会計掛より |
| " | 警務員 | 渡久地 政義 | 採用 |
| " | 社会科学教室事務補佐員 | 中嶋 みどり | " |
| " | 図学教室技術補佐員 | 石田 司 | " |
| " | 体育共同研究室事務補佐員 | 廣山 芳子 | " |
| " | 学生掛事務補佐員 | 市来 千恵子 | " |
| 56. 4. 16 | 整理掛事務補佐員 | 安井 玲子 | " |
| " | 保管運用掛事務補佐員 | 山本 博子 | " |
| 56. 7. 1 | 学生掛事務補佐員 | 市来 千恵子 | 6月30日限り退職 |
| 56. 8. 1 | 保管運用掛事務補佐員 | 山本 博子 | 7月31日限り退職 |
| 56. 9. 1 | 保管運用掛事務補佐員 | 山本 博子 | 採用 |



◎医学部（昭和54年度入学者）進学者数等一覧表

| 対象学生数 | 進学者 | | 原級者 | |
|-------|-----|-------|-----|-------|
| | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 122人 | 94人 | 77.0% | 28人 | 23.0% |

◎昭和54年度（医学部は昭和53年度）以前の進学者数等一覧表

| 学部 | 対象原級者数 | 無条件進学者数 | 条件付進学者数 | 原級者数 | 進学率 |
|------|--------|---------|---------|------|-------|
| 文学部 | 6人 | 0人 | 2人 | 4人 | 33.3% |
| 教育学部 | 16 | 2 | 7 | 7 | 56.3 |
| 法学部 | 4 | 0 | 1 | 3 | 25.0 |
| 経済学部 | 9 | 0 | 1 | 8 | 11.1 |
| 経営学部 | 3 | 0 | 2 | 1 | 66.7 |
| 理学部 | 15 | 3 | 6 | 6 | 60.0 |
| 医学部 | 7 | 3 | | 4 | 42.9 |
| 工学部 | 33 | 6 | 9 | 18 | 45.5 |
| 農学部 | 10 | 2 | 2 | 6 | 40.0 |
| 合計 | 103 | 16 | 30 | 57 | 44.7 |

(対象原級者数には休学者12人を含まない。)

◎過去5年間の医学部進学者数等一覧表

| 回生 (進学年月) | 対象 学生数 | 進学者 | | 原級者 | |
|-----------------|-----------|------|-------|-----|------|
| | | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 13回生 (51年4月) | 121人 | 116人 | 95.9% | 5人 | 4.1% |
| 14回生 (52年4月) | 118 | 111 | 94.1 | 7 | 5.9 |
| 15回生 (53年4月) | 121 | 113 | 93.4 | 8 | 6.6 |
| 16回生 (54年4月) | 113 | 106 | 93.8 | 7 | 6.2 |
| 17回生 (55年4月) | 120 | 110 | 91.7 | 10 | 8.3 |

◎過去1年間の原級生の進学者数等一覧表

| 進学年月 | 対象原級者数 | 無条件進学者数 | 条件付進学者数 | 原級者数 | 進学率 |
|--------------|--------|---------|---------|------|-------|
| 昭和55年 4月 | 104人 | 11人 | 21人 | 72人 | 30.8% |
| 昭和55年 10月 | 75 | 16 | 19 | 40 | 46.7 |

昭和56年4月第Ⅱ課程進学予定者数一覧表

| | | 在籍者数 | | 進学予定者数 | | | | 原級者数 | | 進学率 | | 55.4進学率 | |
|------|-------|------|----|--------|----|-----|-----|------|----|------|------|---------|------|
| | | 計 | 計 | 無条件 | | 条件付 | | 計 | 計 | % | % | % | % |
| | | | | | 計 | | 計 | | | | | | |
| 法学部 | 79年度生 | 53 | 91 | 32 | 9 | 10 | 45 | 12 | 46 | 77.4 | 49.5 | 67.3 | 44.9 |
| | 原級生 | 38 | | 3 | 1 | | | 34 | | 10.5 | | 13.5 | |
| 経済学部 | 79年度生 | 45 | 89 | 17 | 7 | 9 | 26 | 21 | 63 | 53.3 | 29.2 | 53.0 | 35.3 |
| | 原級生 | 44 | | 0 | 2 | | | 42 | | 4.5 | | 11.1 | |
| 経営学部 | 79年度生 | 54 | 79 | 19 | 17 | 19 | 38 | 18 | 41 | 66.7 | 48.1 | 66.7 | 48.8 |
| | 原級生 | 25 | | 0 | 2 | | | 23 | | 8.0 | | 14.3 | |
| 計 | | 259 | | 71 | 38 | | 109 | 150 | | 42.0 | | 43.0 | |

学生自治会との交渉経過

(1981年5月～1981年7月)

5月19日 場所：A棟1階応接室
 出席者：学生側 []自治委員長、[]六月祭実行委員長および自治委員。
 大学側 美崎教正教養部学生委員長および学生委員全員。
 交渉内容：1981年の六月祭について、その他。

6月3日 場所：A棟1階応接室
 出席者：学生側 []自治委員長、[]六月祭実行委員長および自治委員。
 大学側 美崎教正教養部学生委員長および学生委員全員。
 交渉内容：六月祭関係の諸問題（休講措置、現物支給、教室等の借り上げ、使用電力、物品借入

7月7日 場所：A棟1階集会室
 出席者：学生側 []自治委員長および自治委員
 大学側 美崎教正教養部学生委員長および学生委員全員。
 交渉内容：設備（ウォーター・クーラー、保健室、クラス控室、サークル棟、印刷室、女子トイレ、女子シャワーなど）の改善について、保健婦の増員について、六甲祭について、文学部の定員制問題について、1982年度の学費値上げについて、授業料減免について、その他。

第二課程学生自治会との交渉経過

(1981年2月16日～7月31日)

2月28日 55年度備品要求書を受理。(注1)
 3月28日 新入生歓迎行事に関する要求書を受理。(注2)
 3月30日 3月28日付要求書に関する話し合い。
 4月11, 13, 16, 17, 18, 19 新入生歓迎行事。
 4月22日 輪転機故障の補修願を受理。(注3)
 5月13日 部長、自治会他、II課程施設点検。
 6月19日 自治委員選挙公示。

6月19日 II課程用施設への備品要求書を受理。(注4)
 6月25日 6月19日付要求書に関する話し合い。
 6月26日 6月25日の話し合いにおける決定事項のまとめを受理。(注5)追加要求書を受理。(注6)
 6月26日 自治委員選挙。

(注1)

| 備品要求書 | |
|-----------------|---------------------------|
| 1981年2月22日 | |
| 神戸大学教養部長 | 井沢義雄 殿 |
| 神戸大学教養部第II課程自治会 | |
| 執行委員長 [] | |
| 下記の通り備品を請求します。 | |
| 記 | |
| 1. 厚紙 | 20枚 |
| 2. 上質紙 (白) | 10枚 |
| 3. 上質紙 (色紙) | 5枚 |
| 4. 上質紙 (茶紙) | 5枚 |
| 5. 厚紙 (白) | 100枚 |
| 6. サインペン | 0.2mm X 20本 |
| 7. 直インク | 5000cc |
| 8. タナ | 高90cm X 幅90cm X 厚4cm X 2枚 |
| 9. 角材 | 4cm X 4cm X 10本 |
| 以上 | |

(注2)

| 要求書 | |
|---|--------|
| 1981年3月28日 | |
| 神戸大学教養部長 | 井沢義雄 殿 |
| 神戸大学II課程新入生歓迎実行委員会 | |
| 実行委員長 [] | |
| 神戸大学教養部第II課程自治会 | |
| 執行委員長 [] | |
| 例年同様新入生歓迎行事を行ない、新入生を歓迎したいと思います。教養部長が新入生と在校生の間の親睦を深め、相互理解を求め、団結を打ち取っていくというこの行事の趣旨を理解し、協力をお願いします。 | |
| 以上のことをまえ、下記のとおり要求します。 | |
| 記 | |
| 1. 休講措置について | |
| 4月13日 | 2時限目 |
| 16日 | 2 " |
| 17日 | 2 " |
| 20日 | 2 " |
| 2. 予算について | |
| パンフレット「野草」作製費 | 30000円 |
| 障害者交流会映画代 | 20000円 |
| 同講演費 | 10000円 |
| 三里塚闘争映画代 | 10000円 |
| 同講演費 | 60000円 |
| スポーツ大会運営費 | 20000円 |
| 映画映画代 | 50000円 |
| 新歓ハイク補助費 | 20000円 |
| 現物支給 | |
| 更紙 | 10枚 |
| 上質紙 白 | 4枚 |
| 茶 | 1枚 |
| 要紙 | 1枚 |
| ペン | 1枚 |

(注3)

| 補修願 | |
|--|--------|
| 1981年4月22日 | |
| 神戸大学教養部長 | 井沢義雄 殿 |
| 神戸大学教養部第II課程自治会 | |
| 委員長 [] | |
| 記 | |
| 4月9日、新入生歓迎行事の印刷刷りのため教養部から支給されている輪転機を使用中突然、回転が止まり動かなくなりました。以後輪転機が印刷が不可能となり、自治会活動に大きな障害をきたしています。そこで早急に補修していただくようお願いいたします。また、輪転機使用不可能のため代り手段として印刷するための油性インク(旧車の補修時と同様、同規格)の代用品を支給したい。 | |
| 以上 | |

| | |
|------------------------------------|--------------------------|
| おとう紙 | 100枚 |
| バニヤ板 | 8枚 |
| 角材 | 4cm角 40m |
| ポスターカラー | 赤、黒、青 各2 |
| グリップボード | 6枚 (B5判) |
| 鉛筆 | 132本 |
| マジック 大型赤黒 | 各12 |
| 細型用赤黒 | 各12 |
| ホイッスル | 6個 |
| ガムテープ (布) | 3巻 |
| 借用物 | |
| 机 | 4 |
| 椅子 (折りたたみ) | 10脚 |
| マット (バド用) | 30本 |
| ネット () | 6枚 |
| バスケットボール | 8個 |
| ボール | 20枚 (同色) |
| 拡声機 | 2個 |
| 以上 | |
| 附記 | |
| 1981年3月25日第2回実行委員会において次のことが決定しました。 | |
| 1. 実行委員長 | [] |
| 副 | [] |
| 会計 | [] |
| 2. 日程 | |
| 4月13日 | 三里塚闘争映画講演会 |
| 19:30～21:00 | 談話室 |
| 16日 | スポーツ大会 (バドミントン、バスケットボール) |
| 19:00～21:30 | 教養部体育館 |
| 17日 | 映画会 |
| 19:00～21:30 | B109 |
| 18日 | 合同コンパ |
| 19:00～21:30 | 学生会館6Fホール |
| 19日 | 合同ハイク |
| 20日 | 障害者との交流会 |
| 17:30～21:30 | 談話室 |
| 以上 | |

(注4)

| | | |
|------------------------------|-------------------|----|
| 要求書 | | |
| 1981年6月19日 | | |
| 神戸大学教養部長 井沢義雄 殿 | | |
| 神戸大学第II課程ワカメ舎 委員長 [] | | |
| 神戸大学教養部第II課程自治会 執行委員長 [] | | |
| II課程生用施設への備品を下記のとおり要求します。 | | |
| 前 | | |
| 自習室 (旧B105) | ・照明 (蛍光灯) | |
| | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| | ・カーテン | |
| 会議室 (旧B105) | ・スチール黒板 (AR-01) | 1 |
| | ・ハイフイス (NO.118) | 10 |
| | ・スモークスタンド (K-2LB) | 5 |
| | ・カーテン | |
| 第四集會室 (旧B106 男子更衣室) | ・背面ロッカー (OL-15V) | 4 |
| | ・スノコ | 4 |
| | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| 第三集會室 (旧B106 男子更衣室) | ・背面ロッカー (OL-15V) | 8 |
| | ・スノコ (SN-184) | 8 |
| | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| | ・カーテン | |
| 談話室 (旧B107) | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| 第一集會室 (旧B108) | ・スチール黒板 (AR-01) | 1 |
| | ・ハイフイス (NO.118) | 15 |
| | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| | ・スモークスタンド (K-2LB) | 5 |
| | ・カーテン | |

(注5)

6月25日の交渉において決定したNO1

| | | |
|-------|-------------------|----|
| 備品 | | |
| 自習室 | ・照明 (蛍光灯) | |
| | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| 会議室 | ・スチール黒板 (AR-01) | 1 |
| | ・ハイフイス (NO.118) | 10 |
| | ・スモークスタンド (K-2LB) | 5 |
| 第四集會室 | ・背面ロッカー (OL-15V) | 4 |
| | ・スノコ (SN-184) | 4 |
| 第三集會室 | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| | ・背面ロッカー (OL-15V) | 8 |
| | ・スノコ (SN-184) | 8 |
| | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| 談話室 | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| 第一集會室 | ・スチール黒板 (AR-01) | 1 |
| | ・ハイフイス (NO.118) | 15 |
| | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| | ・スモークスタンド (K-2LB) | 5 |
| | ・照明 (蛍光灯) | |
| 第二集會室 | ・スチール黒板 (AR-01) | 1 |
| | ・ハイフイス (NO.118) | 15 |
| | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |

○フラインド
・男子更衣室・談話室を除くすべての各部屋に取りつける
・既設のフラインドの改善

| | | |
|------------------------------|-------------------|----|
| 要求書 | | |
| 1981年6月26日 | | |
| 神戸大学教養部長 井沢義雄 殿 | | |
| 神戸大学第II課程ワカメ舎 委員長 [] | | |
| 神戸大学教養部第II課程自治会 執行委員長 [] | | |
| II課程生用施設への備品を下記のとおり要求します。 | | |
| 前 | | |
| 第二集會室 (旧B108) | ・スチール黒板 (AR-01) | 1 |
| | ・ハイフイス (NO.118) | 15 |
| | ・ダストボックス (D-1-LB) | 1 |
| | ・カーテン | |
| ()内記号は添付資料参照 | | |
| 以上 | | |

(注6)

| | | |
|------------------------------|---|---|
| 要求書 | | |
| 1981年6月26日 | | |
| 神戸大学教養部長 井沢義雄 殿 | | |
| 神戸大学第II課程ワカメ舎 委員長 [] | | |
| 神戸大学教養部第II課程自治会 執行委員長 [] | | |
| II課程生用施設への備品を下記のとおり要求します。 | | |
| 前 | | |
| 第二集會室 (旧B108) | ・机 (会議室においてある机と 同様のもの 幅110cm 幅230cm 高さ75cm) | 1 |
| 以上 | | |

NO2

- 壁面塗装
・談話室を除く各部屋に塗装
- 施設
・男子更衣室に内側からの施設設備
- 表示板
・現在の教養部露表示に準ずる場所、規格
・表示名はNO1のとおり
- 備品は上記品名およびそれに準ずるもの。

1981年6月26日

神戸大学教養部長 井沢義雄 殿

神戸市灘区鶴甲1丁目
神戸大学教養部
第II課程自治会
電話(078)882-5310
委員長 []

部落解放研究会との話し合い記録

(1981年3月13日～7月2日)

- 3月13日(金) 神戸大学部落解放研究会 [] 名にて3月11日付教養部長あて要求書を受理(注1)。
- 3月18日(水) 上記要求書にかかる話し合い。同場所において研修会報告書(55.12.10.56.1.28, 2回分)を手渡す(注2)。
- 4月12日(日) B棟1F西便所にて落書事件発生。
- 4月14日(火) 上記事件について確認会。
- 4月20日(月) 上記事件についての教養部長名の告示掲示(注3)。
- 4月21日(火) 第2回確認会。
- 4月23日(木) 映画「狭山の黒い雨」上映(昼間3限目及び4限目の一部, 夜間2限目を休講とする)。
- 5月2日(土) 第2回確認会における確認書を教養部長から解放研代表へ手渡す(注4)。
- 5月7日(木) 第3回確認会。
- 6月2日(火) 第4回確認会。
- 6月5日(金) 神戸大学部落解放研究会より教養部長あての, これまでの経過等にかかる2種類の要求書提出(注5)。
- 6月18日(木) 第5回確認会。
- 7月2日(金) 第5回確認会における回答書(最終修正分)を教養部長から解放研代表へ手渡す(注6)。

(注1)

要求書

1981年3月11日

教養部長 殿

神戸大学部落解放研究会

下記のことについて3月16日～19日の間に話し合いを持つことを要求します。

記

1. 入学式に於ける講演会の講師
2. 総合コースの総括
3. 来期の総合コース
部落差別についての内容
4. 教職員の研修会の報告
5. 新歓映画会

16日～19日のいずれの日が都合がよろしいか松井迄連絡して下さい。

(注2)

総合科目「人権」(昭和55年度)総括

昭和55年度の総合科目「人権」については、昼間課程では前期に、第二課程では後期に実施されたが、それぞれその最終講義における担当者グループと全受講生との討議を踏まえ、ついで担当者代表と八人委員会との討議を経て、おおむね次のような主旨の総括と次年度へ向けての方針策定が行われ、これが教養部長に報告された。

1. この総合科目は、昭和53年2月本教養部で発生した部落差別文書事件を契機とし、今日わが国に存在する部落差別をはじめとするさまざまな差別問題の解決を見出すことを究極の目的としつつ、大学教育における差別解消のための努力の一環として、昭和54年度より開設されたものである。この差別解消の問題を、なによりもまず教養部自身の問題として捉えるべきであるという見地から、当初コース編成に当っては可能なかぎり教養部教官が担当するという方針をとった。

このようにして発足した初年度の総合科目「人権」については、講義担当者、受講生の共同討議において次のような批判が受講生側から提出された。そのひとつはコース編成に関するもので、テーマの立て方が断片的、総花的で、問題を深く追求することができないという点。いまひとつは講義内容に関するもので、一般的、知識的、抽象的にすぎ、具体性に乏しく、かつ感銘も薄いというものであった。

2. 以上のような批判を検討しつつ、われわれはこの批判がまた、講義者自身の差別問題への係わり方に対する問いかけでもあることについて、深く反省した。種々の検討と討議を踏まえ、われわれは第二年度においては、初年度を経験を経て次のような方針で進むことにした。批判の第1点、すなわちテーマの立て方については、2, 3のテーマにしぼり、それぞれを深くつっ込んで扱えるような編成とする。

かくして、総合科目「人権」の第2年度はテーマを部落問題、障害者問題、民族問題の3本建てにしぼり、他方、実践者として体験ゆたかな講師を外から招いて実施された。講師の招請については、体験を通しての講義ということで鋭意選定に努力した結果、ふさわしい講師を迎えることができたと思う。それぞれ最終講義時の、担当者グ

ループ受講生の相互討議を通じ、以下の諸点が明らかにされたと考える。

すなわち、(1)知識的抽象的で感銘うすいとされた初年度に比べて、実践的具体的な講義内容で迫力あるものとなった。(2)その反面、問題の体系的かつ理論的な取扱いを中心におくことができなかった。(3)講義すべき内容の量と比べて時間が不足気味であった。(4)受講する学生が少なかった等々である。

3. 8人委員会では、指摘された諸点について反省と検討を重ね、次年度以降の計画にこの経験を生かして行くことにした。指摘された講義時間の問題については、とくに第2課程の場合、始業時間が遅れがちになるので、とりあえず時間帯を第1時限から第2時限に移動することで、ある程度は改善される。受講者数の少さについては、なによりも学生自身の意欲が問題であるが、しかしこの意欲を喚起し問題の重要性の周知徹底をはかる努力が、今後ともねばり強くなされる必要がある。また講義の理論的体系的側面の不十分さという点は、充分首肯しうところである。したがって、この方面の補強ということについて、可能な限り速かに別に方途を検討すべきものであると考える。

4. 以上のような総括によって、即刻改善しうる方策はすぐ実施に移すこととし、昭和56年度の「人権」については、実施の都合上、今年度の編成をもう1年継続する。そして、この問題についての実践上の先達たる現講師の先生がたには、われわれが当初お願いしたとおり、体験を通しての講義というその持味をあくまで徹底して頂くこととする。もとより、提出された批判に対する反省を踏まえつつである。そして理論的体系的側面の加味ということもふくめて、より充実した新コースの編成の計画策定は、新年度のもっとも大きな仕事となるであろう。いずれにしても、われわれは総合科目「人権」が部落差別をはじめとするもろもろの差別を廃絶するという窮極の目的のための、大学教育の場における努力の一環として設けられたものであるという原点につねに立ちかえり、批判と反省による改善を重ねつつ、ねばり強くこの講義の発展充実を期して行きたい。

1981年3月30日

神戸大学教養部長
井澤義雄

神戸大学部落解放研究会殿

(注3)

教養部学生諸君へ

4月20日

教養部長

4月12日、B棟1階西端の男子便所内において、未解放部落の人びとに対する明らかな差別的言辭と部落解放運動の冒瀆的否定とをふくむ落書が発見された。

すでに再三にわたって同種の事件があり、そのつど注意を喚起して来たが、今回またしてもかかる事件が起ったことに対し、われわれはなによりもまず、その卑劣な所業によって傷つくすべての未解放部落の人びとに対し申し訳なく思うとともに、かかる許しがたい行為をあえてした者に対し深い憤りを覚える。

今回の落書もその性質上なに者の行為であるか特定しえないが、われわれは本教養部学生の絶対多数がかかかる行為に無関係であったと信じる。ただ、それがたとえ1人の行為であったとしても、その有する深刻な意味はまともに受け止められなければならない。

すでに幾たびかの差別的事件を経て、われわれは差別的諸現実の廃絶を目標に、あらゆる偏見から解放された真に開かれた場としての教養部づくりのため微力ながら努力を重ねて来た。われわれはあらためていま、教養部構成員めいめいが差別せず差別を許さないという決意において一体となって、この努力をさらに強めて行くことの必要性を痛感する。学生諸君の協力を切に要望する。

(注4)

確認書

4月12日、B棟一階西端の男子便所内において、未解放部落の人びとに対する明らかな差別的言辭と部落解放運動の冒瀆的否定とをふくむ落書が発見された。すでに再三にわたって同種の事件があり、そのつど厳しく注意を喚起して来たが、今回またしてもこのような事件が起ったことに対し、われわれはなによりもまず、その卑劣な所業によって傷つく、すべての未解放部落の人びとに対し申し訳なく思うとともに、かかる許しがたい行為をあえてした者に対し深い憤りを覚える。よしんばそれが隠微な場所における落書であったにしても、われわれはその有する深刻な意味をまともに受けとめなければならない。

すなわち、この落書の全体は、ある思想的政治的イデオロギーによる、謂うところの「共産派」「赤」

なるものへの激しい誹謗中傷と考えられるが、重要なことは、単にイデオロギー上の相異対立、またそれにもとづく誹謗中傷といったことによっては断じてすまされない、部落差別的な性格が蔵されているということである。それはなによりもまず、未解放部落の人びとを啓示するために用いられているきわめて侮辱的な言辭に明らかに示されている。

またそれは、謂うところの「狭山」の闘争に対して向けられた「制裁を！」という言辭にも明らかに露呈している。われわれが学びえたかぎりから判断しても、この事件は深刻に部落問題と関係しており、部落差別という問題を抜きにしてはその全体を正確に捉えることはできないと思う。狭山闘争が、無実のための闘いであり、同時に部落差別との闘い、部落差別からの解放のための闘いという、二重に人権上の闘争であることに思いを致すならば、これに対して向けられた言語道断な表現は、明らかに差別的言辭といわざるをえず、決して許されるべきものではない。

さらにまた、落書全体の文脈によって、謂うところの「共産派」「赤」のなかに、解放のために闘う未解放部落の人びとがふくまれていると判断される以上、「反自由の共産派根絶を！」「リベラル神大を赤く染めるな」等の表現のなかには、学外のみならず学内の部落解放運動に対する冒瀆的否定さえ含意されていると考える。今日に存続する差別的現実に対し責任があるのは誰れなのか、なにゆえに悲痛かつ苛烈な闘いが不断に闘いつづけられねばならぬのか、こうしたことともに謙虚に思いを致すならば、われわれのすべてがこの解放のための運動に襟を正して対すべきでこそあれ、冒瀆的な差別言辭は決してこれを許すことができない。

最後に、すでにわれわれは昭和53年2月の差別文書事件以来、神戸大学部落解放研究会との話し合いをふまえ、日本国憲法、教育基本法、同対審答申の精神にのっとり、差別的諸現実の廃絶を目標に、あらゆる偏見から解放され真に開かれた場としてのキャンパスの精神的風土づくりに取り組んで来ているが、このわれわれの志向するところこそ、真の意味での「自由」、真の意味での「リベラル」であることを、われわれは疑わない。表現の自由といい、言論の自由という。批判する自由、相互批判する自由さえ、あくまでも尊重されねばならぬだろう。しかしあらゆる自由にもかかわらず、差別的言行を表現する自由、要するに差別する自由などといったものが断じて許されないことを、われわれは基本的人権の名においてここに言明する。

1981年5月2日

神戸大学教養部長
井澤義雄

神戸大学部落解放研究会殿

(注5)

要求書(その1)

1981年6月5日

教養部長殿

神戸大学部落解放研究会

4・12差別落書事件を受け、我々部落解放研究会との確認——糾弾会の中で、落書自身の具体的差別性が一つ一つ明らかにされてきました。そのことを見抜けなかったことをまずはじめに反省し、教養部当局として、またそれを構成する一員として、78年2月10日の差別事件以後、自ら具体的に何をとりくんで来たか、そしてそこで何をつかみとってきたのか、話し合いの中で我々が絶えず問うてきた部落出身学生の利害を、石川一雄さんをはじめとする闘う部落大衆の思いを検証点として自らをとらえかえしていただきたいと思います。

教養部長名で提出された確認書の中に書かれている「我々のすべてが、解放のための運動に襟を正して対すべき」「表現の自由・言論の自由というが差別される自由はない」等の文章は、我々との話し合いの中で深まったことが確認されており、このことを我々は評価するとともに信頼しているわけで、この確認にもとづいてこれからの教養部が、部落解放への努力をすることをさらに要望します。

しかし、「差別を許さない」ということは「差別はいけない」と頭の中で考えることではありません。一つ一つの具体的事態をめぐってどう態度をとるのかということをはっきりと示さなくては、差別は根絶しないし、神戸大学内の差別落書は後をたたく、部落出身学生は差別にさらされ続けることとなります。4・12差別落書きをその手で書きたらと思うられる反共・ファシストを容認していくことなどは教養部当局としても許せないことでしよう。

以上述べたように、4・12差別落書事件についての確認—糾弾をふまえ、

① 78年2・10差別事件以後、部落解放のために努力してきたとするにもかかわらず、またもや差別事件がおこり、あまつさえその差別性すら見抜けなかったことに対して今後のとりくみに向けた飛躍点ともなるべく自己批判を文書として出すこと。

② 今月中に部落解放研究会が主催する「4・12差別落書真相報告集会」に参加され、教養部当局とし

て「差別を許さない」という態度表明と、今後の決意を、学生、教職員をも含む全構成員のもとに明らかにすることを要求します。

要求書 (その2)

1981年6月5日

教養部長殿

神戸大学部落解放研究会

今年、3月25日に東京高裁は、狭山異議申立てをデタラメな棄却決定文をもって棄却しました。石川さんの両親は、しばらく病気で入院中でしたが、この棄却決定を受け、5月23日の「石川氏不当逮捕18年糾弾中央集会」には、「一雄がかえってくるまでは死んでも死にきれない」と病気を克服し、老体にムチ打って闘いに参加しています。

警察、裁判所は、狭山で、無実の部落民であるという一点で逮捕し、有罪判決を下し、18年間獄中に閉じ込めています。このように狭山異議申棄却、特別措置法打ち切り、「部落地名総鑑」や、今年度の差別落書きで煽動しているように部落大衆の命と生活は、日々おびやかされています。

我々は、18年間、獄中で不屈に闘い続ける石川一雄さんを先頭とする部落のおっちゃんやおばちゃんの狭山闘争一部落解放運動に立ちあがってきた格闘をどう思うかで、態度で受けとめていくのかということに常に問いかけてきました。

4・12差別落書きは、4月14日から4回にわたる我々との話し合いで確認してきたように、部落大衆への徹底した蔑視にもとずき、狭山差別裁判糾弾斗争一部落解放運動へ正面から敵対し、無実の部落民石川さんをまさに獄中死にたたきこみ、全国三百万部落大衆を死においやる煽動をするものです。教養部当局としても、5月2日の教養部長の確認書をふまえ、話し合いの中で我々に断言した「差別を絶対に許さない」という言葉の具体的な行動の一つとして以下のことを要求します。

記

1. 狭山差別裁判とその糾弾斗争を徹底的に学習し、狭山差別裁判糾弾声明を出す。
2. 同和対策特別措置法の強化・延長、部落解放基本法制定に向けた声明、及至は上申を出す。
3. 10月中頃予定している、部落解放研究会主催の講演会(講師:部落解放同盟中央統制委員長米田富氏)における、休講措置と、ともに全学構成員に対し参加のはたらきかけを行う。

(注6)

回答書

6月5日付貴研究会の要求書に対し、7月1日の教授会において審議のうえ下記のような回答を得ましたので、ここに回答します。

(要求書その1について)

(1) 教養部長見解(反省と決意)

ある言行を差別的言行たらしめるものは、その言行の意識的たると無意識的たるとを問わず、それが差別される者にあたえる深刻な傷による。差別性を見抜くとは、この差別された者の傷と痛みを、われわれがどれだけリアルに実感できるかということと関係すると思う。

今回の差別落書事件に関し、われわれはこの落書の蔵する差別的性格のすべてをすぐに見抜くことはできなかった。その原因の一部は落書の文章表現の様態と関係があったことも否定しえないが、重要なことは、われわれがこの落書によって傷つく人たちの痛みを痛みとして実感することがなかなかできなかったことにある。それは、われわれの生活実感が、部落差別によって苦しむ人たちの現実とまだまだ距離をおいたところにあったということに他ならない。われわれはまずこのことを卒直かつ深刻に反省したい。

いまわれわれは、差別性を見抜くことは頭のはたらきであるよりも、むしろ心の問題であったと納得する。われわれはすでに78年2・10差別文書事件以来、自己批判を踏まえ、これまで教養部としてなんら対応して来なかったことに対する反省を経て、窮極的にはあらゆる差別的現実の廃絶を目標にあらゆる偏見から解放されて真に自由な教養部づくりのためにいくつかの施策を講じて来た。この努力の方向が基本的に正しいものでなかったとはわれわれは考えない。ただ、われわれの努力にもかかわらず、今回またしても差別的落書事件が起ったこと、すなわちわがキャンパス内で未解放部落の人びとを深く傷つける事態が生じたことにつき、われわれは深く反省しなければならない。そしてわれわれは、われわれ自身のこれまでの努力がなお差別に苦しむ人びとから遠くにあったことを思わずにはいられない。

この距離を乗り越えるには無限の努力がいるかも知れない。また差別性のすべてを見抜くために、われわれはまだまだ差別された人たちによって教えられ、学ばなければならないかも知れない。しかし確かなことは、われわれが自らの新たな決意において、差別された人びとの現実の方へ確実に一歩を踏み出すことは可能だということ、この一歩

一歩をたゆまず続けて行くことは可能だということである。

われわれはこの反省と決意を、われわれが現に講じつつある解放のための教育の諸政策のなかに具体的に生かし、これら諸施策を真に内実化させ、発展させて行きたいと考える。そしてわれわれの解放のための教育と学生諸君の解放のための運動が、たがいに相手の立場を理解し尊重しつつ、部落差別廃絶の目標にむかって、また偏見なき学園づくりのために努力して行くことの必要を、あらためてここに痛感する。

(2) 貴研究会との話し合いの経過、およびすべての交換文書の、教養部構成員への報告は、79年8月23日の話し合いにおいて、「教養部広報」によってこれを行うこと、全構成員にもれなく配布することを約束し、かつ同年10月の教授会においてこれを決定し、以来これを実施してきている。

教養部教職員、学生をふくめた全構成員に問題の所在を周知徹底させるためにも、この方法が適当と思われるので、今回もこの方法をもって学校側の報告を行いたい。

(要求書その2について)

(1) 狭山問題については、かねてから教官研修会でとりあげる計画をもって、近く被告弁護士団弁護士を招いて、学習することになっている。その学習を踏まえ、しかるべき時点において教養部教官としてとるべき態度につき検討したい。

ただ、事柄が国の司法権に関することだけに、国の教育研究機関たる大学の、教養部教授会が教授会としての声明ないし統一見解を出すことは、なお問題をつきつめて考えてみる必要がある。教官個人ないし教官団としての対処ということならば、もとより可能である。

(2) 同対法の延長、強化等に関する声明ないし上申の件は、毎年入学式当日に同対審答申・同対法の全文を、神戸大学の名において新入生全員に配布している経緯もあって、この問題を部局長会議に出して検討してもらったが、結論的には、国の研究教育機関である大学がこの種の立法問題について声明ないし上申をすることは適当でないということになった。したがって、教養部としてもこの方針に従わざるを得ない。

ただし、われわれはもとよりこの法の帰趨については深い関心をもってはいるものであり、教官が個人の立場でこの問題について対処することは、もとより可能である。そのためにも、同対法の延長・強化の必要性、部落解放基本法の問題について、学習にとり組みたい。

(3) 教養部が解放のための教育を進めるにあたって、未解放部落の人びとに接し、直接的にその生みの声を聞くことは、なによりも貴重な学習になると思う。

ただ、授業上の措置等の面で学校が関与する場合は、教育基本法の精神にのっとり、また同対審答申にいう、「教育の中立性」が損われぬよう、細心に配慮する必要がある。たとえば、他の解放運動諸団体に属する人を講師に招くような要望に対しても、均等な機会が保証されるという前提がなければならない。

まだ時日もあるが、学校側にも種々の制約があるので、実施にあたっては事前に充分話し合いをしておく必要がある。以上

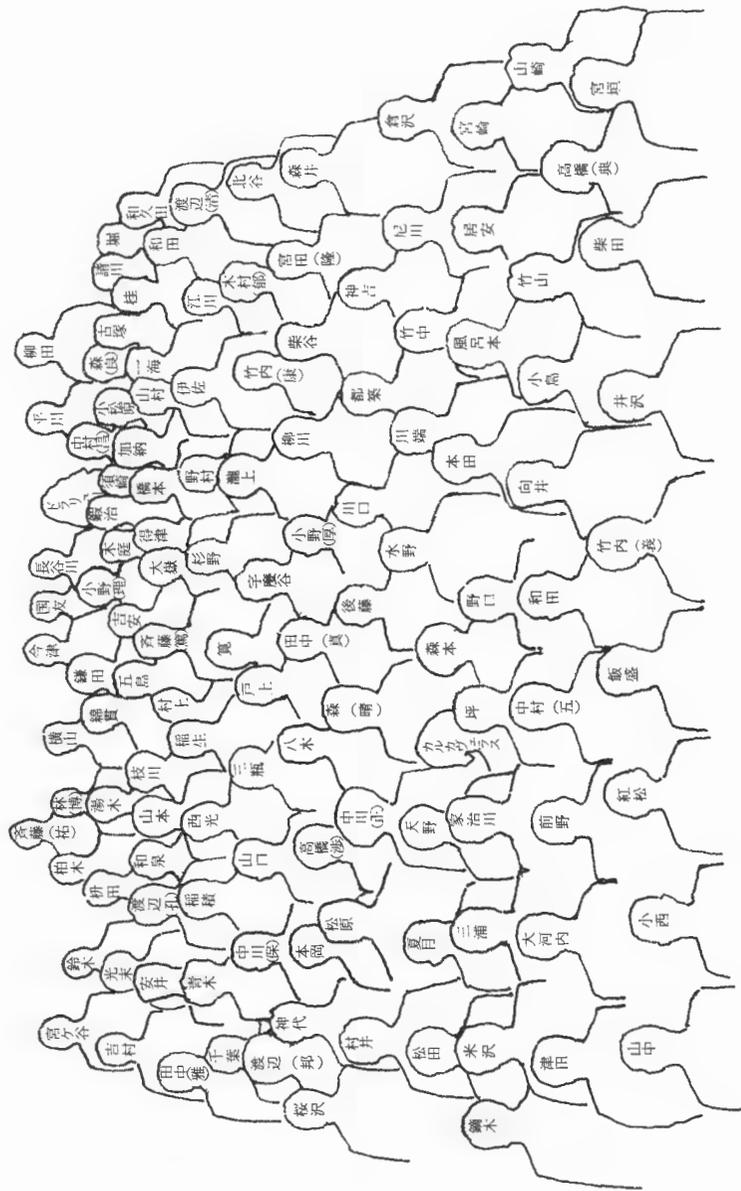
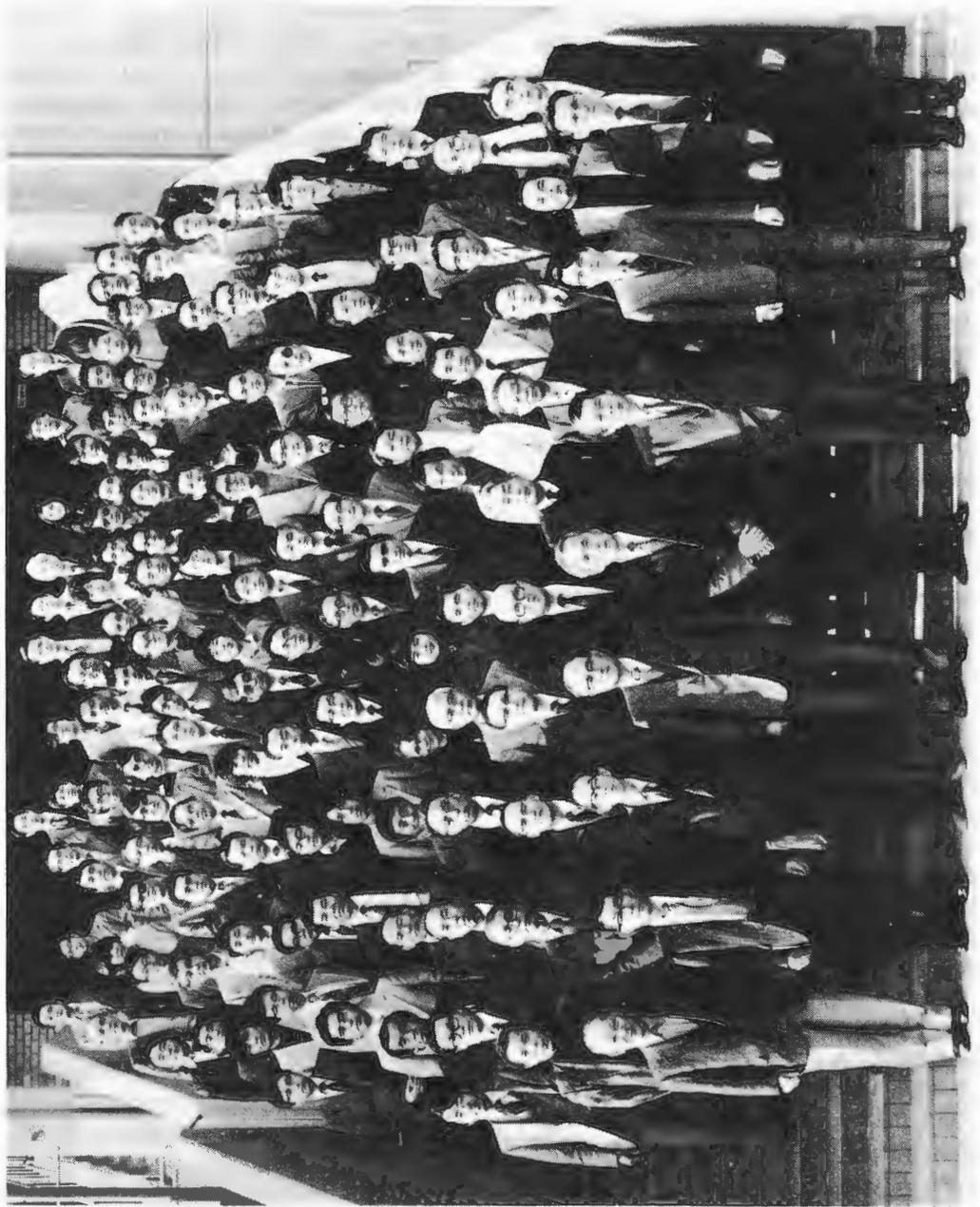
1981年7月1日

神戸大学教養部長

井澤義雄

神戸大学部落解放研究会殿





編集後記

今年4月からの新しい広報委員会による最初の広報をお届けします。

あつい夏だったにもかかわらず素晴らしい原稿を書いていただいた各教職員の方がたならびに学生諸君にあつくお礼申し上げます。おかげさまで、いつもよりあつい広報となりました。

ご覧のように、今度の広報は、そのほかにも多少これまでとは違った体裁を誇っています。紙質を落した反面、表紙を2色刷りにしたこと、巻頭言を読み易くしたこと、新人紹介欄が大変充実していること、三つも特集があることなどです。

次号は60号記念の、これまた大特集号になるはずです。よろしくお願ひします。 (宮崎)

新 広 報 委 員 紹 介

| | | |
|---------|-----|---|
| 宮 崎 興 二 | ・ 図 | 学 |
| 稲 積 包 昭 | ・ 英 | 語 |
| 竹 内 章 | ・ 独 | 話 |
| 広 森 勝 久 | ・ 数 | 学 |

